

昭和三十一年度

財団法人

東洋文庫年報

東洋文庫

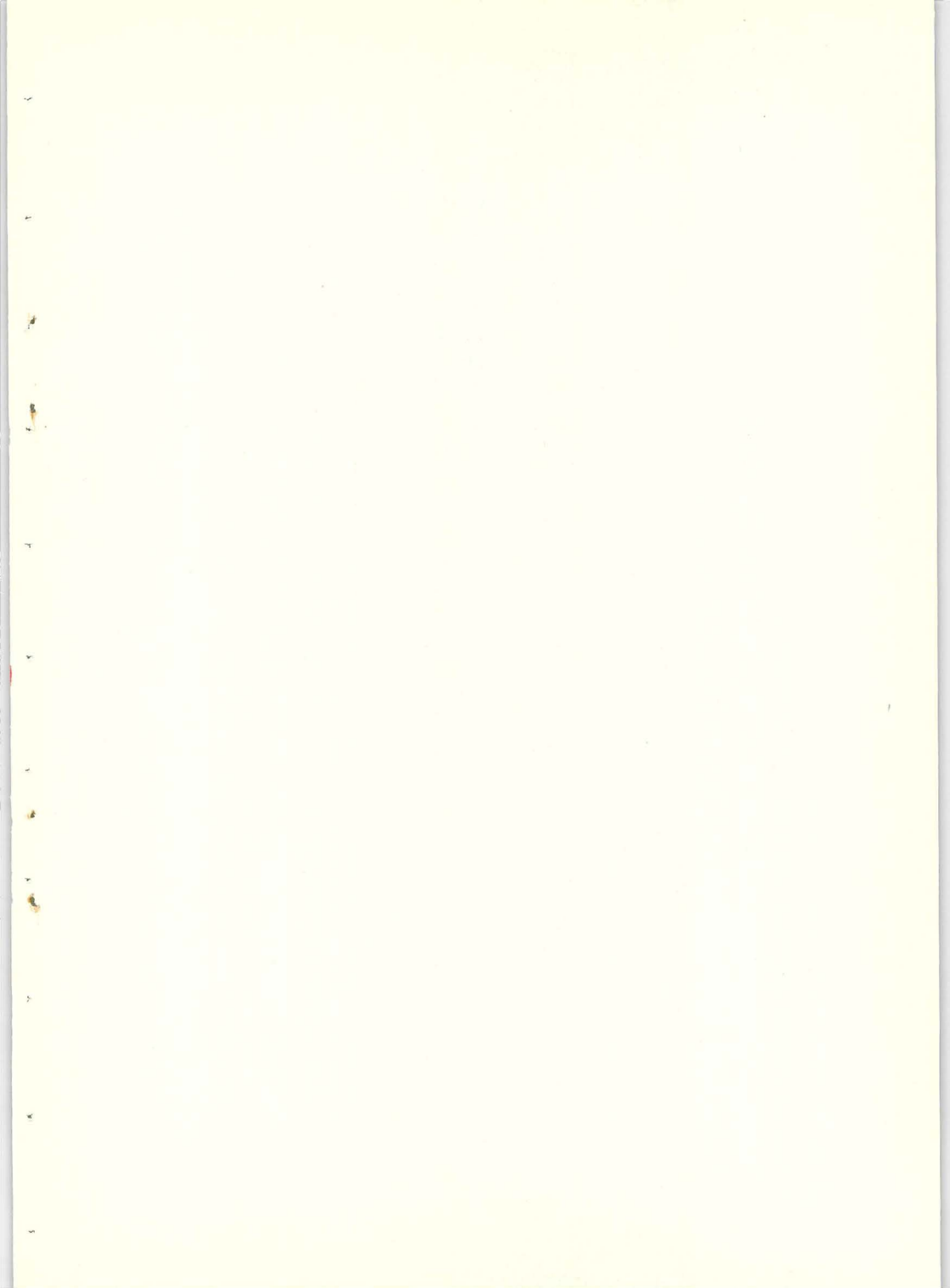
昭和三十八年度東洋文庫年報

目次

一	東洋学センターとしての東洋文庫	一
二	昭和三十八年度に於ける東洋文庫	三
三	和田清理事の逝去	榎 一雄 六
四	職員	一八
五	事業	二五
1	刊行図書	二五
2	講演会(東洋学講座)	三三
3	研究会(東洋文庫談話会)	三五
4	展示会	六五
5	図書の収蔵及閲覧	六六
	(A) 資料室	
	(B) 国立国会図書館支部	
6	資料複写	七二
7	情報連絡	七三

六	研究調査活動……………	七五
1	東洋学連絡委員会……………	七五
2	特定研究……………	七六
3	各種研究委員会……………	七六
	第一部 近代現代アジア研究……………	七六
	近代日本研究委員会……………	七六
	近代中国研究委員会・近代中国研究センター……………	七八
	第二部 東アジア研究……………	八〇
	敦煌文献研究委員会……………	八〇
	宋代史研究委員会……………	八二
	明代史研究委員会……………	八三
	古代史研究会……………	八三
	第三部 満蒙・朝鮮研究……………	八三
	清代史研究委員会……………	八四
	鮮満関係史研究会……………	八四
	第四部 中央アジア・イスラム・チベット研究……………	八四

	中央アジア・イスラム研究委員会……………	八五
	チベット研究委員会 付 第十一回日本西蔵学会大会……………	八五
	第五部 南アジア・インド研究……………	八七
	南アジア研究委員会……………	八七
	4 研究者養成……………	八八
	5 職員の研究業績……………	九二
附(一)	ユネスコ東アジア文化研究センター……………	一〇〇
(二)	東洋学術協会……………	一一三



一 東洋学センターとしての東洋文庫

東洋文庫は、大正六年（一九一七）、故岩崎久弥氏が中華民國總統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソン氏の蔵書を購入して設けられた東洋学関係の専門研究図書館である。大正十三年（一九二四）に現在地に財団法人として設立せられてより今日まで、研究部・図書部・総務部を設け、(イ)アジア各地域の研究資料を網羅的に収集し、(ロ)東洋学の研究を推進すると共に全国の専門研究者に便宜を供与し、(ハ)各種の貴重な資料の複製を行い、重要な研究業績を出版し、(ニ)あわせて東洋学の普及事業と研究者の養成とに専念してきた。第二次大戦後の経済事情変動のため打撃をうけた東洋文庫は、昭和二十三年（一九四八）図書部が国立国会図書館支部となつて、その維持管理を受けることとなつたほか、更に民間学術研究機関補助金、外国よりの援助金が寄せられて、研究部の事業と組織体制とを整えてきた。

東洋文庫の特色は、専門図書館としての文献資料センターの機能と、総合的研究機関としての研究センターの機能及び国内的国際的研究情報センターとしての機能を兼ね具えている点にある。東洋文庫は、(イ)一般研究者に対し収集資料を公開し、民間機関としての自由な立場で運営されている。(ロ)一大学、研究機関個々では系統的収集の困難な資料に重点を置いて収集している。(ハ)海外及び地方在住研究者者に対して、マイクロフィルムによる資料複写サービスを行い、収蔵せる貴重資料を覆刻して逐次刊行し学界に提供している。(ニ)一大学、一研究所の枠を越えた総合的研究体制を取つて、各大学、研究機関に跨る流動的共同研究、国際的協力研究を行っている。(ホ)国内的及び国際的研究情

報の交換、通信連絡の衝に当り、我が国の研究成果を広く海外に紹介している。(イ)我が国東洋学の成果を広く一般に普及し、来日せる海外のすぐれた東洋学者の講演を公開する場を提供し、また貴重な資料を展示する活動を行つてい
る。(ロ)東洋学の特殊な専門研究者を養成し、各大学の大学院博士過程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を
与え、特に比較的未開拓な分野の研究を促進せしめている。人文社会科学の振興が叫ばれ、その方策として総合的研
究センター乃至専門文献センターの設置、整備が唱えられつつあるとき、従来よりその方向を目指して活動してきた
東洋文庫には、一層内外の期待がかけられている。

二一 昭和三十八年度に於ける東洋文庫

昭和三十八年度における東洋文庫の一般事業は、前年に引続き文部省大学学術局を通じて日本政府から、またハーヴァード・エンチン研究所、東洋文庫維持会から、補助金並びに援助金を受けて行われた。

文部省補助金による事業を挙げれば「東洋文庫所蔵近代日本関係文献目録——和書・マイクロファイルムの部——Ⅲ」及び「スタイン収集敦煌文献及び研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文文献分類目録稿——古文書之部——第一分冊」「東洋文庫所蔵歐文旅行記目録」の編集刊行を含む、各種研究室の一般調査研究、「東洋文庫欧文紀要第二十三」「東洋文庫叢刊第十六・欽定西域同文志・下」(前年度追補)の編集刊行、講演会、研究会、図書資料の収集などが行われた。講演会は、ハンプルク大学教授アンネマリエ・フォン・ガベイン、インド考古学協会総長A・ゴーシユ両氏を含む十三氏によつて、研究会は、インディアナ大学教授C・サイナー氏を含む八氏によつて行われた。購入図書は単行本・和漢書四一三点、洋書五〇六点、定期刊行物・和漢書一九五点、洋書五八点であるが、国内・国外各研究機関との交換による収集文献は、単行本・和書三三九、漢・韓書八二六、洋書六八八、定期刊行物・和書一、五一九、漢・韓書六六二、洋書八八一点の多数に上つた。

特別事業としては、文部省科学研究費交付金によるアジア地域総合研究として、三十五年以來行われてきた「イスラム諸国の社会構造」が、新たに特定研究として継続をみとめられたほか、フォード財団援助金による「二十世紀中

国とその背景に関する研究」、アジア財団援助金による「近代中国研究センター」事業がそれぞれ第二年度を迎え、ロックフェラー財団援助金による「チベット人との協力によるチベット語、チベット史、宗教・ラマ教史の研究」が第三年目を迎えた。またワシントン大学との協同出版として「東洋文庫所蔵滿蒙文圖書目録」が刊行された。

昭和三十八年十一月十日、日本西蔵学会は、第十一回大会を東洋文庫を会場として開催、東洋文庫チベット研究室はその事務局を担当したほか、右学会に協賛して、東洋文庫所蔵のヨーロッパ人によるチベット探検記・チベット語辞典及びチベット文献の展示会を、九・十両日に亘つて開催し、国立国会図書館の援助を得て解説目録を印行した。なお文部省学術情報室の協力の下に企画せられた東洋学文献センター連絡協議会の名において、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所三所所蔵「日本文・中国文・朝鮮文等逐次刊行物目録」が編集刊行された。昭和三十八年六月二十二日夜、かねて療養中の、前専務理事、和田清博士が、享年七十三歳を以て永眠せられた。博士がわが国の東洋学の発展と東洋文庫の経営とに尽された大きな功績は永く記念さるべきものであり、つつしんで哀悼の意を捧げるものである。また、理事、洪沢敬三氏は、同じく十月二十五日夜、享年六十七才を以て逝去せられた。生前の文庫に対する御厚誼に厚く感謝するとともに深く哀悼の意を表するものである。

人事面における三十八年度の動きとしては、榎一雄専務理事が、三月三十一日より四月三日にわたりローマに於て開催された国立リンチェイ学会 (Accademia Nazionale dei Lincei) 主催の国際学会「文明の歴史におけるキリスト教東方世界」(L'Orient Cristiano nella Storia della Civiltà) に出席、五月五日より九日の間、日米翻訳会議出席のためハワイへ出張、更に三十九年一月四日より九日の間、ニューデリーで開催せられた、第二十六回国際東洋

学会議に出席した（東洋学報、第四六卷四号彙報参照）。客員研究員として来日中の、ハンブルク大学アンネマリ
エ・フォン・ガベイン教授は九月離日せられた。

本年度における研究者養成としては、文部省補助金及びハーヴァード・エンチン研究所補助金をうける者、計四名
（外国留学中のものを除く）がある。なお岡田英弘研究生は、三十八年四月よりユネスコ東アジア文化研究センター
職員となり、同十月ケルン大学ハイシツヒ教授の招きに応じ退職、渡欧した。

東洋文庫付置ユネスコ東アジア文化研究センターにおいては、所定の出版計画のほか、三十九年度初頭に開催予定
の「東アジア諸国における社会階層と社会移動に関する国際協力調査」のための国際会議の準備を了えた。また、セ
ンターの生田滋研究員は、三十七年七月より、欧米諸国に於ける国立古文書館活動の視察調査のため、ユネスコ、フ
ランス政府及びオランダ政府奨学生として海外出張中であつたが、アメリカ、フランス、オランダ、スペイン、ポ
ルトガルの主要図書館・古文書館を歴訪、ワシントン大学図書館学夏期講習、フランス国立古文書館主催国際古文書館
技術講習会等に出席し、実習を行つて、三十八年七月末帰国した。

三 和田清理事の逝去

榎 一 雄

昭和三十八年六月二十二日夜、かねて療養中であつた和田清先生（一八九〇—一九六三）は、病遽かに革つて、自宅に近い東京都世田谷区成城町の木下病院の一室で逝去せられた。病名は肺炎による心臓衰弱。享年七十三歳。六月二十五日杉並区堀ノ内火葬場で荼毗に附し、二十六日自宅で告別式が行われた。戒名を堯文院殿史学智照日清大居士という。越えて八月九日、四十九日忌を期して、郷里神奈川県茅ヶ崎市の墓域に埋葬せられた。逝去に当つて従三位勲二等に陞叙せられ、祭葬料を下賜せられた。

先生は平生自他共に許す無類の健康体を誇つて居られたが、昭和三十四年四月、脳血栓を病まれて以来、俄かに弱くなられ、入院を繰返して居られた。それでも筆を執ることに若干の不自由を感じられたほかは、会合への出席、散歩を欠かさず、殊に先生の無二の楽しみであつた読書は依然として続けて居られた。ところが、昭和三十七年十、十一月頃からは散歩も止め、訪客にも会わず、三十八年に入つてからは、何回かの肺炎を繰り返された。しかし、その都度回復せられ、周囲の人々を喜ばせて下さつたが、その何回目かの肺炎に打勝つことが出来ず、遂に溢焉として筆を易えられたのである。

先生は神奈川県の人。明治二十三年（一八九〇）十一月十五日、高座郡鶴嶺村即ち今の茅ヶ崎市萩園二三四番地

に、節三郎・幸の長男として生まれた。生家は土地の豪家で、先生自身既に幼少の頃から自分名儀の田畑を多くもつて居られたそうである。代々清右衛門を称していたので、清と名づけられた。従つて清はキヨシではなく、セイと読むのが正しい。しかし、世間にはキヨシと読む人が多かつたので、ローマ字の署名には S. K. Wada と書かれたこともある。長男ではあつたが、上に七姉があつた。七人目の女の子が生まれた時、これでおしまいだらうとスエと名づけたところ、先生が生まれ、さらにもう一人女兒が誕生したので、得をしたというので、トクと名づけたといふことである。生父篤三郎氏は兄篤太郎氏の養子として和田家を継いでいたが、普通であれば地方の地主として終つたかも知れない先生を、学問の道に進ませたのは、祖父（伯父）篤太郎氏の理解と奨励によるところが多かつたと聞いている。

先生は鶴嶺小学校高等科第三学年を終了して神奈川県立第一中学校（今の希望ヶ丘高等学校）に入り、第一高等学校第一部甲類（英語法律科）を経て、明治四十五年（大正元年、一九一〇）、東京帝国大学文科史学科に入学、東洋史学を専攻することになつた。白鳥庫吉・市村瓚次郎両博士が教授、幣原坦博士が助教授。大正二年から箭内互・池内宏両氏が講師として参加された。大正四年（一九一五）、史学科を卒業し、大学院に入つて市村教授指導の下に清朝史特に康熙乾隆時代の研究に従われた。大正六年（一九一七）、先生は清朝史研究のため内藤虎次郎・矢野仁一両教授の教を受けようと京都帝国大学に遊んだ。悪憎両教授は出張されたので、史学関係の諸講義を聴き、考古学科の助手であつた梅原末治氏等と親しく交わられた。大正七年、萩野由之・田中義成両博士に従つて朝鮮・満洲・支那を旅行、大正八年二月帰朝せられて以後、中央大学予科・京華中学校・日本大学等に教鞭を執られた。そして、大正

十一年（一九二二）、東京帝国大学文学部講師を嘱託せられ、「近世支那の地方制度」、引続いて「清朝史」の講義をせられた。今の新潟大学教授植村清二氏は先生の最初の講筵に列せられた受業第一号である。そして大正十四年（一九二五）から昭和二年（一九二七）まで、英・仏・独・米・支等の諸国に留学、昭和二年三月、その帰朝に先立つこと三ヶ月にして東京帝国大学助教授に任ぜられた。

これより先、東京帝国大学では白鳥・市村両教授が新たに定められた定年申合せに従つて退職せられ、池内・箭内両氏が教授に陞任した（一九二五）。ついで箭内教授逝去（一九二六）の後を承けて、藤田豊八博士が教授に任じた（同年）。藤田教授は、昭和三年三月（一九二八）、新設の台北帝国大学に転じ、加藤繁博士が同年五月助教授に任ぜられた。池内・和田・加藤のトリオはその後十年、昭和十四年、池内教授定年退職の時まで続いたのである。昭和八年、和田先生は教授に陞り、昭和十六年、加藤教授退官の後には、東洋史学科を主宰して、昭和二十六年、定年退官の時に及んだ。

先生は大正四年、卒業に際して「清初の蒙古経略」と題する論文を提出せられた。それはその後増訂を施され、大正六年六月、「内蒙古諸部落の起源」（奉公叢書五、目黒書店）と題して刊行せられた。これが先生の世に問われた最初の力作である。そして最後に発表せられたのが達延汗に関する研究であるから、先生の研究は蒙古近世史に始まり、またそれに終つた観がある。大学での講義も明清時代の蒙古・満洲に関するものが最も多い。昭和四年以来、南満洲鉄道株式会社調査部から当時東京帝国大学文学部に移されていた「満洲に於ける地理歴史調査」を委嘱せられ、満鮮地理歴史研究報告十二以下十五までに毎号大作を発表せられた。これらはそれまで十分に研究されていなかった

この時代の蒙古・満洲の歴史を明かにしたもので、関係の史料を殆んど漏れなく蒐集し、検討し、排比して、塞北の情勢の展開を述べている点において、博覧にして周到なる先生の学風を遺憾なく發揮しているものである。それは昭和十四年二月、嘗て満鮮地理歴史研究報告に発表せられた「明初の満洲経略」・「明初の蒙古経略」の二篇を提出して、文学博士の学位を授与せられたことから知られるであろう。

しかし、二百五十を数える先生の著作の目録が雄弁に物語つてるように、先生の興味は決して満蒙の近世史にのみ限られていたのではない。それは東亜の全域のあらゆる題目に及んでいた。支那史に関しては、その制度史・歴史地理及び清朝史に最も関心があり、大学でも何回か講義をされ、関係の論考が頗る多い。殊に清朝史は先生がその定年退職を期として徹底的に研究することを予定されていた題目であつた。また支那史料に現われた台湾・フィリッピンの研究や、支那とビルマとの交通史の研究等は、この方面に関する研究の嚆矢として今日なお重きをなしている。中でも隋書の流求国が台湾に他ならないことを論ぜられた「琉球台湾の名称に就いて」(東洋学報十四ノ四、大正十三年)に対して出された、民俗学的に見て流求国は今の琉球である、和田氏は民俗学を知らないという批評を反駁し、流求国の決定についてはその地理的位置に関する記述こそ重んぜらるべきで、民俗学的記事は何等の役に立たない、そのために敢えて触れなかつたのであることを明かし、当時の民俗学に関する代表的著作の殆んど悉くを援用し、批評者こそ十分な民俗学的知識を有していないではないかと論ぜられた「再び隋書の流求国について」(歴史地理五十七ノ三、昭和六年三月)は、学者としてのみならず、論客としての先生の気魄をよく伝えているものである。

先生には散歩と将棋とを除いて、特別の趣味とか娯楽とかはなかつた。書物を読むこと。これが先生の生活のすべ

てであつた。それも専門の研究に関するものだけではなく、活字になつてゐるものであれば何でも読まれた。いわゆる大衆小説の類は先生の最も愛好せられた所で、十畳ほどの一室の周囲に天井につくまで作られた書架の全部がこの種の書物で埋つていた。しかも恐らくそれは先生の眼を通された大衆小説の一部にすぎなかつたであらう。やや固いものでは鷗外の史伝ものなどを愛読され、異つた版が出るたびに買つて読まれたそうである。さらに驚くべきは比倫を絶した先生の記憶力であつた。先生は専門書や史料を読むに當つて、メモもノートもとられなかつた。明実録・李朝実録のような浩瀚なものは流石に書抜きを作られたらしいが、その他のものは一度眼を通せばその儘記憶してしまわれ、何か論文を書く場合には、関係の記事のある書物を座右に堆く積み、書くに従つて必要な部分を抽出して行かれたという。会合の時日や場所、人と会う約束の時間等も手帳に書込むなどのことはなかつたそうである。大衆文芸にしても、その小説の筋を語られること詳細を極めた。先生には特別の書斎などはなく、自宅では茶の間で家族と談笑しながら読んだり書いたりして居られた。自分は家族と団欒しながら勉強している。先生は屢々こう語られたものである。騒しければ一緒に騒ぎながら、静かならば静かなままで読書し、執筆せられたのである。自宅でも、研究室でも、訪客があれば喜んでこれを迎え、請われれば勿論、請われなくても、新得の見解を説いて倦むことを知らなかつた。

先生は加藤先生と交替で、隔年東洋史概説を講義せられた。その骨子は、始め支那（上・下）として岩波講座東洋思潮に入り、後、増補して中国史概説（上・下）として世に送られたものであるが、実際の講義は誠に富贍と博洽とを極めたもので、文字通り、先生の広範囲な読書と、比倫を絶した記憶力とによつて蓄えられた知識が、自ら堰を切

つて迸り出たといふべきものであつた。先生自らも講義が役に立つのは、主題以外のことを講述者がしやべつてくれる所にあると言つて居られたが、先生のは正にその役に立つ講義の典型であつた。談佳境に入れば、ノートなどほども取れないので、筆を抛げて、先生の大きな頭を眺めているほかはなかつた。

先生にはまた「支那史論」(アジア問題講座七、昭和十四年)、「滿蒙史の大勢」(同上)・「支那史序説」(世界歴史二、昭和十六)・「東亞民族發展史序説」(改造二四ノ三、昭和十七年)という一聯の論文がある。これらは東亞史をその諸民族の發展を中心に極めて動的に捉えられた史論で、歴史家としての先生の本領が最もよく示されている点において、先生の代表的著作の一つと言ふべきであろう。私は寡聞にして今日までこれを凌駕するに足る東亞史論に接したことがない。

先生は何時勉強しているのか判らないのによく出来るのが、ほんとうに出来るのだとも言われた。また研究には *Painstaking method* があるだけだとも論された。この一見矛盾しているような二つの態度は、先生自身の体験から出ている、一向に矛盾しないものであつたようである。先生は何時勉強していられるのか判らないほどに、絶えず勉強して居られた。そして訪客を捉えては、絶えず論文の口頭発表をして居られたのである。趙爾巽氏が先生に讀した書幅に、

先生口不絶吟六芸之文、手不停披百家之編、記事者必提其要、纂言者鉤其元、貪多務得、細大不捐、

とある。これは先生が北京を去られる時、趙氏の使が駅に届けてくれたものだと思つて承つてゐるが、それが何年のことであつたのか、遂に聞漏した。(この書は先生の古稀記念東洋史論叢の巻頭の先生の写真の背景をなしている。) いずれ

にしても誠によく先生を評した言葉である。特に末尾に「食多務得、細大不捐」とあるのは、正にその通りであった、汽車で旅行していて本など読んでいようものなら、何という知識欲のない男だ、汽車に乗つたら窓から外を見ると叱られるし、印刷物は新聞・雑誌、汽車の時間表、電話帳の類に至るまで、貴重な史料だからとすべて保存された。一番閉口するのは学生の答案がすべてとつてあることである。

先生が東京大学で三十年間に教えられた学生の数は、東洋史学科だけで四百人に近い。(これに他学科からの聴講者や、京都大学・日本大学・立正大学・明治大学・慶応義塾大学・国学院大学・聖心女子学院大学・九州大学・名古屋大学・国際基督教大学等で教を受けた人々を加えると、その数は更に多くなる。)これは明治二十年から大正十五年(昭和元年)まで四十年間の東洋史学関係の卒業生の総数が八十人に足りないのに比較すると、正にその五倍を超える人数であつて、東洋史学科で先生ほど多くの学生を教えられたのは、空前であるばかりでなく、今後も見られないのではあるまいか。

昭和の初期から二十年に至る間は、東アジアにおける日本の発展が最も活発に行われた時期で、これに呼応してアジア関係の公私の研究所・図書館等の新設拡充、大規模な図書その他関係資料の蒐集、考古学・民族学・慣行制度等の調査団の派遣、アジアに関する専門研究書、民衆のための啓蒙書の刊行等が相次いで行われた。それまで一学年にせいぜい三、四名しかなかつた学生数が一躍十数名乃至二十数名を数えるに至つたのは、東亜に対する関心の高揚と実際の需要とを反映しているものであつた。先生がそれ以前にはないほどの多くの学生を数えることになつたのは、主としてそのためである。

こうした世の動きは、また先生を書齋や研究室にのみ閉じこめては置かなかつた。東亜考古学会評議員・日本諸学振興委員会歴史部臨時委員・東洋文庫評議員（後に理事）・興亜委員会幹事・東方文化学院評議員・學術振興会・民族研究所設立準備委員・東亜史概説編纂會議員・學術研究会議委員・大東亜博物館創立準備委員會委員・日華協會評議員。これが昭和五年から二十年までに先生が關係せられた学会・研究機關・編纂事業等の主なものである。さらに昭和十四年以降、先生は殆んど毎年のように朝鮮・滿洲・支那等に出張し、調査に活躍せられた。白鳥先生や市村先生でもこんなに御忙しくはなかつたろう。これは先生が或る時私に漏らされた言葉である。しかもこうした多忙の間に講義をし、大作を陸続と發表されていたのであるから、その精進力闘には敬服のほかはない。先生が人々の予想を裏切つて意外に早く館を捐てられたのも、この頃の多忙にその原因の一つがあつたのかも知れない。

戦後も先生は相変わらず多忙であつた。先生は東大新大学制度実施準備委員・東大附屬学校開設準備委員・大学審査委員を委嘱せられたのを始め、東方学会理事・中日文化協會理事、さらに日本學術會議員（一九五一―五四）として、新教育制度の準備と実施、学界の新しい出発とに力を尽された。そして昭和二十六（一九五一）十月、日本学士院会員に選ばれ、その卒去の時に及んだ。

終戦は日本の史上にその比を見ない変革を社会に与えた。それは日本人の価値観に根本的变化を齎したもので、戦前の權威と秩序、伝統と理想とは、すべて謬つたもの或いは有害なものとして、一時に崩壊するかに見えた。財閥は解体せられ、貴族は廢止せられ、戦前の社会を支えていた支柱は、一挙に除き去られたかの趣があつた。先生自身も不在地主の一人として、その広大な所有地の大部分を失うことを余儀なくされた。この新しい情勢の変化を先生がど

のように受取られ、どのような心構えを以てこれに対処されようとしたか。これについて特に承つたことはないが、先生の生立たれ、そして活動して来られた環境を考えると、苦々しく感ぜられることが随分多かつたに相違ない。しかし先生は一方において新しい人々の言説に耳を傾け、その意図する所の理解に力められると共に、他方においてはどしどしと自分の研究を進められた。先生は学問においても、実生活の面においても、先入主に支配されたり、食わず嫌いであつたりする人ではなかつた。先生は自分の主張や信念を容易にまげる人ではなかつたが、改めるべき点があれば、これを改めるのに些かも躊躇することがなかつた。無用の摩擦を起すことは避けられたが、必要があれば常に堂々とその所信を開陳せられた。先生が最も排斥せられたのには、環境に応じて浮沈する無節操な態度であつた。嘗て津田左右吉博士がその著書の故を以て起訴せられた時、先生が関係の検事たちを前にして日本上代史の講義をせられ、神武天皇が実在の天皇であり得ないこと等々を説いて、津田博士の学問的立場を堂々と支持された如きは、その一例である。今日になつて見れば当然のことかも知れないが、当時においては余程の勇氣を必要としたことである。また昭和十四年南京において資料調査を行われた際、国民政府が北京の清朝の故宮から移した重要美術品の類を貯えていた保存庫と呼ばれた倉庫を日本軍が占領保管しているのを見て、こうした品物を押えて支那民衆の怒りを助長することの愚を説き、早速支那側に返還すべきであると、中支派遣軍の参謀と激論を戦わされたことがある。幸い先方が先生の意図を諒としたので、事なく収つたけれども、一時は同席した案内の保坂三郎氏・同行の市古宙三氏とともに、どうなることかと成行きを憂慮したことであつた。

しかし先生は決して自分の考えを相手に押しつけようとはされなかつた。例えば卒業論文の題目の選定にしても、

構成にしても、学生の意向を重んじ、干渉を加えることはなかつた。人にはそれぞれの立場があり、意見があることを諒解し、その立場や意見を十分尊重せられた。これは自分が卒業論文の準備をせられた時、市村博士から不必要とも思われる細かい注意を受けた、苦がい経験によるものらしいが、主として先生自身が他人に干渉することの嫌いな性格に基づくものであつたと思われる。明治の御代に人となられた先生は長幼の序、師弟の礼を厳格に守り、恩師に對しては文字通りその影を踏もうとされなかつたが、他人に同様のことを期待されることは絶えてなかつた。先生の自由放任主義は頗る徹底したもので、令息令嬢の高等学校・大学は勿論、中学校への進学に際しても、全く本人任せにされ、受持の先生の感情を害してしまつたことさえあつた。と言つて、先生は決して自分さえよければという利己主義者ではなかつた。相手の立場や利益に温かい理解を示し、援助や激励を与えることを惜まれなかつた。気は余り長い方でなかつたから、雷を落されることも稀ではなかつたが、先生に接するほどの人は常に先生の心の底に流れている温情と親切とを感じて、恩特に己に厚しと考へていたようである。和田先生の許に多くの門下生が集まつたのは、時勢の影響による所が少なくないとしても、それらの人々は誰しも学者としての先生の偉大さに敬服すると同時に、飾り気のない先生の人間としての温かさに打たれ、先生のためであればという気構えをもつようになつた。そうした性質の書物の出版の容易でない時に、還曆と古稀と両度に互つて祝賀論文集が出たというのも、偏へに先生の大きな包容力の致す所であると言えよう。

新しがつたり、知つたかぶつたりすることの嫌いな先生は、些かも身边を飾ることがなく、衣服や什器は一番安いもので間に合わせる主義だと言つて居られた。随分つけつけと物を言われたが、他人にも思う所を率直に述べること

を期待されていた。とりわけユーモラスなことを言ったり、聞いたりするのを喜ばれた。或る夏、女学校を卒業された長女と館山に旅行をされた。宿の女中が何を間違えたのか、令嬢を奥様と呼んだ。先生は自分がそれほど若く見えるのかと、会心の笑を禁ずること能わず、ここで、ねえ、あなたと言えば、もつと遠くへ旅行につれて行つてやると、例の大きな声で令嬢にささやかれたという。何か面白いことを申上げた時、先生が興がつて笑われる声音が今日でもなお耳底に残つていて懐しさに堪えない。

戦後先生が最も苦心されたことの一つは、東洋文庫の経営であつた。大正十三年（一九二四）十一月、設備・図書は一切と二百万円の基本金とをもつて財団法人となつたこの文庫は、当時日本における東洋学の唯一の専門図書館・研究所として終戦まで最も豊かに経営されて来た。ところが基本金が最も利廻りのよい南滿洲鉄道株式会社の株に代えられていたので、終戦と同時にそのすべてを失うことになつた。この苦境を打開し、戦後十八年、東洋文庫が再びその基礎を固めて今日に至つたのは、先生の努力による所が頗る多い。先生は大正十年（一九二二）この文庫がまだモリソン文庫と呼ばれていた頃から、これに関係せられ、財団法人になつてからは研究員・評議員・理事・研究部長・専務理事を歴任せられた。東洋文庫の蔵書の中でも、滿蒙語の図書、方略・地志・家譜の類など、この文庫の特殊コレクションとして内外に知れているもの多くは、先生の発案と努力とによつて集められたものである。

先生は大正八年（一九一九）東洋学報の編輯委員に挙げられ、終戦後、発行の母胎であつた東洋協会（學術調査部）が解散し、東洋学報が新たに東洋学術協会から発行されることになることになると、委員長として編輯及び発行の責任者になられた。委員長になることは随分躊躇されたが、諸般の事情から已むを得ずこれを引受けられた。発行の引受け手のな

かつた東洋学報が先ず国立書院によつて復刊第一号を出すことが出来たのは、先生が同書院の重松竜覚氏に交渉せられた結果であり、その後一時危機に瀕した同誌の財政を建直すことが出来たのも、先生の配慮によるものであつた。

今、先生が学界に尽された功勞と教えを受けたものに惜みなく与えられた庇護と推輓とを顧みる時、更めてその足迹の偉大さと温情の深さを感じずには居られない。私共は一層精進して、一つでも多く優れた研究を世に送るとともに、先生の残されたいくつかの事業を継承し、一層これを發展せしめて、後に続く人々に伝えて行きたい。先生は恐らく天上からも渝らぬ温情を以て私共の行く手を見守つていて下さることであろう。

先生自訂の年譜と詳しい著作目録が和田博士古稀記念東洋史論叢の巻頭に、また先生がその研究生活を回顧せられた「学究生活の想い出」が「東亜史研究」（満洲篇）（東洋文庫論叢三七、昭和三十年十二月）に収められている。この文章と併せて読まれることを希望する。

四 職 員

理事會

理事長

細川 護立

(文化財保護委員會委員)

専務理事

榎 一雄

(財団法人東洋文庫研究部長 東京大学教授)

理事

有光 次郎

(株式會社吾孀製鋼所取締役會長)

石黒 俊夫

(三菱地所株式會社社長)

岩井 大慧

(国立国会図書館支部東洋文庫長)

渋沢 敬三

(昭和三十八年十月二十五日逝去)

徳川 宗敬

(日本博物館協會々長 日本図書館協會顧問)

松本 重治

(国際文化會館専務理事)

山本 達郎

(東京大学教授)

和田 清

(昭和三十八年六月二十二日逝去)

監事

岡 東 浩

(東山農事株式會社常務取締役)

評議員會

評議員

磯野 長藏

(株式會社明治屋會長)

梅原 末治

(京都大学名誉教授)

奥田 東

(京都大学総長)

総務部

参部

事長

大河内 一男	(東京大学総長)
大浜 信泉	(早稲田大学総長)
大原 総一郎	(倉敷レイヨン株式会社々長)
川北 禎一	(日本興業銀行株式会社社長)
小泉 信三	(日本学士院会員)
酒井 杏之助	(株式会社第一銀行相談役)
新村 出	(日本学士院会員 京都大学名誉教授)
高橋 竜太郎	(協和醸酵工業株式会社取締役)
高村 象平	(慶応義塾大学塾長)
辻 直四郎	(日本学士院会員 東京大学名誉教授)
俣野 健輔	(飯野海運株式会社々長)
松方 三郎	(株式会社国際テレビフィルム社長)
小林 吟重郎	
平野 豊	松前 義治 箕輪 友吉
奥島 久仁子	高野 尚子 田口 幸子
竹内 サクノ	

技能員 秋元美恵子 足達綾子 池田直人

一瀬美恵子 児野寿満子

作業員 石井浜吉 白倉豊松 勝間勇次郎

熊田信次郎 染谷コウ

図書部 部長 岩井大慧 宇都木章 片桐一男

司書 石黒弥致 森岡康 渡辺兼庸

田川孝三 秩父良子 大塚祐子

司書補 竹之内信子 村越晃

榎一雄

研究部 部長 岩井大慧

研究顧問 岩村忍

梅原末治

辻直四郎

原田淑人

村田治郎

(京都大学人文科学研究所教授)

(日本学士院会員)

(京都大学名誉教授)

東洋学連絡
委員会委員

山本達郎

岩井大慧

梅原末治

榎一雄

金倉円照

杉本直治郎

鈴木俊

塚本善隆

辻直四郎

仁井田陞

原田淑人

福井康順

松本信広

宮崎市定

村田治郎

山本達郎

(東北大学名誉教授)

(広島大学名誉教授)

(中央大学教授)

(国立京都博物館々長)

(東京大学東洋文化研究所教授)

(早稲田大学教授)

(慶応義塾大学教授)

(京都大学教授)

名譽研究員

吉川 幸次郎 (京都大学教授)

P・ドゥミエヴィル (コレージュ・ド・フランス教授)

S・エリセイエフ (ソルボンヌ大学教授 前ハーヴァード・エンチン研究所々長)

W・フックス (ベルリン自由大学教授)

B・カルルグレン (前スウェーデン王立極東古代博物館長)

E・O・ライシャウアー (ハーヴァード大学教授 駐日米国大使)

W・サイモン (英国学士院会員 ロンドン大学教授)

G・トゥツチ (ローマ大学教授 イタリア中東亞研究所長)

研究員

菊池 英夫

北村 甫

佐々木 正哉

研究員(兼任)

青山 定雄 (中央大学教授)

荒松 雄 (東京大学東洋文化研究所助教授)

市古 宙三 (お茶の水女子大学教授)

岩生 成一 (日本大学教授)

梅原 末治

神田 信夫
(明治大学教授)

河野 六郎
(東京教育大学教授)

佐伯 富
(京都大学教授)

末松 保和
(学習院大学教授)

鈴木 俊

周藤 吉之
(東京大学教授)

関野 雄
(東京大学東洋文化研究所助教授)

田中正俊
(横浜市立大学助教授)

鳥海 靖
(東京大学助手)

中嶋 敏
(東京教育大学助教授)

藤枝 晃
(京都大学人文科学研究所助教授)

松本 信広

松村 潤
(日本大学助教授)

三根谷 徹
(東京大学助教授)

護 雅夫
(東京大学助教授)

山根 幸夫
(東京女子大学教授)

助 手
研 究 生

山本達郎	金子良太	鶴見尚弘	遠藤純子	国岡妙子	二瓶幸子	広瀬洋子
草野靖武田幸男	山口瑞鳳 <small>(在ペリ)</small>	片野裕子	敷地望	橋本昌子	双川俊江	本庄比佐子
		草野祐子	白川邦子	飛弾早苗		

五 事 業

1 刊行図書

「欽定西域同文志」下冊（追補） 東洋文庫叢刊 第十六 A5判 三三八頁＋86＋396頁

さきに東洋文庫所蔵の西域同文志の複製を刊行したが、同書は満・漢・蒙・藏・準・回の六体にて記され、その利用は非常に困難であるので、これがローマ字への翻字を試み、満・漢字は松村潤、蒙・藏・準字は岡田英弘、回字は本田実信が担当した。

なお東洋文庫所蔵の刊本は第二次修訂本であつて、これに先だつ第一次纂定本が大英博物館に所蔵されている。この写本は零本で全二十四の中、僅か五巻しか残っていないが、刊本とは多くの異同があり、必ず参照すべきものと思われるので、とくに大英博物館当局にその複製の許可を求め、その複製ならびに翻字を附録した次第である。また利用の便宜から昨年度刊行したものと合本して下冊とした。昭和三十九年度にはこれが研究篇と索引を刊行する予定である。

田坂興道著「中国における回教の伝来とその弘通」上・下巻 東洋文庫論叢 第四十三 A5判 上 八五二頁
下 八七三頁

本書は、昭和三十二年春、病歿された故田坂興道氏の遺稿で、氏が昭和十九年、東方文化学院研究報告として提出せられ、その後も補訂を試みられつつあつたものである。目次の概要は左の通りである。

著者遺影

序

著者年譜及び著述目録

序論

序章 敘述の方針と其の範圍

第一章 アラビアにおける新宗教 al-Islam の成立概観

第一節 新宗教の成立

第二節 唐代の文献に見えた新宗教の成立事情

第二章 イスラム以前におけるアラビアと中国との交渉

第一節 アラビア側史料より見た両者の交渉

第二節 中国史料より見た両者の交渉

第三章 イスラムの通称「回教」その他の名称とその由来

第一節 「回教」の名称の由来

第二節 「回教」の名義に対する宗教的解釈

第三節 中国における「回教」の異称

本論

和田清

第一章 回教の中國伝來に関する諸説とその批判

第一節 隋開皇年間説

第二節 隋大業年間説

第三節 唐武徳年間説

第四節 唐貞觀二年説

第五節 唐貞觀六年説

第六節 唐永徽二年説及び結論

第二章 唐宋時代の中國における回教徒

第一節 唐宋人の「大食」に関する知識と当時の南海地方における回教徒の活動

第一項 唐宋人の大食に関する知見

第二項 唐宋時代における南海回教徒

第二節 唐宋時代の中國に往來在留せる回教徒

第一項 大食と唐・五代諸國との交渉及びその時代の中國における回教徒

第二項 大食と宋との交渉及び宋代中國における回教徒

第三節 唐代の回紇の宗教は回教にあらず

第四節 疏勒及び于闐地方の回教化

第三章 元朝治下における中国の回教徒

第一節 蒙古族の勃興と回教徒

第一項 遼・金と回教徒との関係

第二項 蒙古の西征と回教徒

第二節 元朝治下の中国における回教徒の分布

第一項 西部及び北部の回教徒の分布

第二項 南部及び中原地帯の回教徒分布

第三節 被治者としての回教徒―蒙古主権と回教徒との関係

第一項 回教徒の被治者の地位及び回教徒と諸外教徒との関係

第二項 元代回教徒の宗教的活動の面と蒙古族の改宗状況

第四節 元代における回教徒と漢人との関係

第一項 西方回教徒に関する知見

第二項 元代漢人の回教徒及び回教観と回漢相互の関係

第四章 中国的回教徒社会の成立

第一節 元明鼎革の回教徒に及ぼした影響と明代漢人の回教徒に対する態度

第一項 元明鼎革と明朝の対回教徒方針

第二項 明人一般の回教徒観

第三項 回教本地に対する明人の知識

第二節 明朝と回教徒との交渉―特に回教徒の中国への移住

第一項 明代回教諸国の概況―特に東トルキスタンと東南アジアの回教事情

第二項 回教諸国と明との通好

第三項 西方回教徒の来帰

第四項 蒙古地方における回教徒とその来帰

第三節 回教徒の発展と中国的回教徒社会の成立

第一項 明代の中国における回教徒分布の様相

第二項 外来回教徒華化の一面として見たる彼等の改姓

第三項 中国回教徒社会構成の人的要素

第四項 回教徒流氓の発生

第五章 中国的回教教学の勃興

第一節 中国へ伝来せる回教の特色

第一項 中国回教の用語上に見えるペルシヤ語の影響

第二項 中国回教教学上におけるペルシヤ的色彩

第二節 中国回教教学勃興の基礎

第一項 回教徒の中国文化吸収

第二項 中国回教教学の先駆として見たる初期の漢文回教碑銘

第三節 明末における中国回教教学の勃興

第一項 明末の回教学者、特に王岱輿について

第二項 明末の回教教学、特に王岱輿の学風

第六章 中国における回教文化

第一節 中国における回教文化の綜観

第二節 札馬刺丁の西域儀象

第三節 「元祕書監志」に見える西域の文献及び儀器

第四節 回回曆法と回回天文書

第五節 欧州文明の東漸と回回曆法の運命

結論 参考文献要目

Naoshiro TSUJI: Notes on the Rājasthya-section (IX, 1) of the Mānava-śrautasūtra.

Namio EGAMI: The Formation of the Race and the Origin of the Nation in Japan.

Nobuo YAMADA: Uigur Documents of Sale and Loan Contracts Brought by Otani Expeditions.

Goro TOYODA: An Analysis of the Simple Kitai Characters.

近代日本研究室編「東洋文庫所蔵近代日本関係文献分類目録——和書・マイクロフィルムの一部——」第三分冊 昭和

三十八年十二月 B5判 三三四頁

東洋学文献センター連絡協議会編「東洋文庫・東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所収蔵日本文・中国

文・朝鮮文等逐次刊行物目録」昭和三十九年三月 B5判 一七八頁

Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko, by Poppe, N., Hurvitz, L. & Okada H.

The Toyo Bunko & The University of Washington Press 1964 (「東洋文庫所蔵滿蒙文圖書目録」) B

5判 三三七頁

A List of Books on Travels and Voyages at The Toyo Bunko 限定百部 B4判 一二六頁 (Index

一〇四頁)

「昭和三十七年度財団法人東洋文庫年報」昭和三十八年十二月 A5判 一一一頁

近代中国研究委員会及び近代中国研究センター出版物

「近代中国研究」第五輯 A 5判 三四一頁

村松 祐次 二十世紀初頭における蘇州近傍の一租棧とその小作制度

佐々木正哉 咸豊二年郵県の抗糧暴動

中国文雑誌論説記事目録(三) 「時務報」総目録

「東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録」 B 5判 二〇四頁

「近代中国研究センター彙報」 B 5判 各三二頁

第三号

江西ソヴェト関係資料(陳誠コレクション)目録

新刊案内

佐々木正哉 「咸豊四年広東天地会の叛乱」補

センター・ニュース

第四号

太平天国史研究論文目録(中国文新聞雑誌之部)

日本人の新中国旅行記

センター・ニュース

新刊紹介

2 講演会

東洋学講座

春期

第百六十二回 昭和三十八年五月十五日

「西域仏寺の伽藍配置について」

東京国立文化財研究所美術第一研究室長

熊谷宣夫

第百六十三回 昭和三十八年五月二十二日

「日本民族の形成と日本国家の成立について」

東京大学東洋文化研究所教授

江上波夫

第百六十四回 昭和三十八年五月二十九日

「ポルトガルの東洋貿易における諸問題」

九州大学教授

箭内健次

第百六十五回 昭和三十八年六月五日

「準噶爾史考」

京都大学教授

羽田明

第百六十六回 昭和三十八年六月十二日

「元朝の海上貿易政策」

お茶の水女子大学助教授

和田久徳

第百六十七回 昭和三十八年六月十九日

「The Hellenistic Elements in the Art between Khotan (于闐) and Yün-Kang (雲崗)」

秋期

第百六十八回 昭和三十八年十月十六日

「ルイス・フロイスの『日本史』と『書翰』について」

清泉女子大学教授 松田毅一

第百六十九回 昭和三十八年十月二十三日

「梁職貢図の西域関係記事について」

東京大学教授 榎一雄

第百七十回 昭和三十八年十月三十日

「明代西南シナ諸土司の民族系譜的考察」

上智大学教授 白鳥芳郎

第百七十一回 昭和三十八年十一月六日

「東亜の古ガラス」

京都大学名誉教授 梅原末治

第百七十二回 昭和三十八年十一月十三日

「ランダルマの子孫について」

京都大学助教授 佐藤長

第百七十三回 昭和三十八年十一月二十日

「東洋的古代」

京都大学教授 宮崎市定

特別講演会

昭和三十八年十一月四日 「最近のインド考古学界」

3 研究会

昭和三十八年四月二十日「西周宗法封建社会論の疑点」

宇都木 章

” 六月十一日「ホレーシオ・ネルソン・レイ

——明治維新の国際関係と歐人企業者の活動に関する一考察」

田中時彦

” 十月二十九日「高麗初期の官階について」

武田幸男

” 十二月十四日「東突厥の国家内部のソグド人」

護 雅 夫

” 十二月三十一日「アルタイ言語学の課題」

Indiana University Prof. Denis Sinor

昭和三十九年二月一日「洪武政権の確立時期について」

山根幸夫

” 二月二十九日「第二十六回国際東洋学者会議に参加して」

榎 一 雄

” 三月二十八日「外務省の文書より見たる我が満蒙史研究の回顧」

河村一夫

講演要旨

ポルトガルの東洋貿易に関する諸問題

箭内健次

ポルトガルの東洋貿易は十六・七世紀を中心として各方面に互る問題を含む世界史上重要な歴史現象である。しか

しこの問題に関する研究の現状はまだ極めて不充分であるといわざるをえない。その原因は種々挙げられるが、第一に關係史料を専らポルトガル側の古文書に依存せざるをえないという点にある。勿論ポルトガル人と接した東洋諸国においても、その事實は記録されてはいるが、それがポルトガル側の主動的形式で展開されたことと、東洋諸国の記録の性格から具体的記述に欠けている。且つその上この分野はヨーロッパ史、東洋史（近東史、インド史、東南アジア史）及び日本史に跨るためにその綜合的研究には夫々の分野の研究者による有機的連繫が不可欠であり、この点からみても現在最もおくれた領域であることは否定できない。

従つて本テーマの研究を少くとも東洋史の分野内において進展させるためにはポルトガル所在の根本史料の調査とともにその時期におけるインド史及び東南アジア史の研究の促進が要請されるのである。本論においてはその中、ポルトガル側の關係史料の所在、及び研究の現状などについて三年前現地に赴いた際の調査に基いてその一端を述べることにしたい。

ポルトガル側の關係史料は本国のみならず、ゴア及びマカオ等に散在しているが、近年リスボンの中央海外植民地史研究所*においてマイクロフィルムによる蒐集が行われ、既に目録が次々に刊行されているので、^①遠からず本国において一括利用しうると思われる。

* (Centro de Estudos Históricos Ultramarinos)

本国において關係史料を所蔵する文書館は各地に散在するが、その中最も豊富な文書館はリスボンのトルレ・ド・ト
ンボ文書館 (Arquivo Nacional da Torre do Tombo) であつて、この外アジア図書館 (Biblioteca Publica da

Ajuda) 国立図書館 (Biblioteca Nacional) 、『ホボラの図書館 (Biblioteca Publica de Evora) 等を挙げることもできる。トルレ・ド・トンボ文書館はポルトガル最大の文書館であるばかりか、世界的な古文書館で蒐集古文書は数百万点にも及びその全貌を捉えることすら困難である。案内書もあるが不十分であり^⑧、その中から関係文書を発見する事は殆んど不可能に近い。僅に襲蔵古文書群の名称をマルティンス・ダ・シルバ・マルケス (Martins da Silva Marques) の案内書によつて察知しうるにとどまる^⑨。しかしその中で東洋貿易関係文書はモンスーン文書——正しくはインドより送られた文書 (Livros dos Monções, Documentos Remetidos de India) 六十二冊を第一に挙げねばならない。本文書は題名の示すごとくポルトガルの東方植民地より本国に送付された文書数千点を含み、時代は一六〇五年より五十一年に互つている。私はこの中、日本及中国フィリピン関係の分約六百数十点を撮影^⑩したが本文書こそこの方面の研究の最も中心的史料である。尚本文書中十二巻までは先年五冊本として刊行されたが残り未刊である^⑪。尚モンスーン文書の外 *Corpo Cronologico, Gavetas* 等の文書にも関係史料があり、その他尚相当多数存在すると想像されるがその徹底的な調査には可成の年月を必要とすると思われる。

次にアジア図書館は古くより我国に知られているが、それは架蔵文書中「アジアにおけるイエズス会士 (Jesuitas na Asia)」と題する一連の文書が存在するからであり^⑫、これは伝道関係記事が中心であるが、その間貿易に関する記述も少くない。その大要は岡本良知氏の「ぼるとがるを訪ねる」に掲げられているが、それによつても知る如く日本関係より中国、インドシナ関係文書を多く含んでいる。これは既に一部東大史料編纂所にマイクロ写真が収められており、やがてはすべて日本に齎されるものと思われる。尚本館にはこの他、ローマバチカン図書館文書でポルト

ガルの分を写した二百三十八冊に及ぶ *Reum Lusitanicum* と題する文書群中にも若干見られるが、極めて不十分な目録しか作成されていない^⑧この図書館文書から抽出するのは頗る困難である。

国立図書館の中の古文書部中にも関係史料が散見する。この内容については別講に譲るが、十六世紀末の十年間に亘る香料貿易の文書などは貴重なものであらう^⑨。しかし概してポルトガルの関係文書はオランダやイギリスの貿易史料に比し統計的記述乏しく、従つて系統的數量把握は可成困難である^⑩。

我国におけるポルトガルの東洋貿易研究は多く第二次的著作によつて行われた。例えばインド地区については、*Whiteway*^⑪や *Danvers*^⑫など、マカオ貿易については *Ljungstedt*^⑬や *Montaldo de Jesus*^⑭など代表的著述であつた。勿論これらは優れた著作ではあるが、それらに導かれた研究には当然大きな限界があつた事は免れない。しかし其後ポルトガル人以外のヨーロッパ人による研究も大いに進展し、ことに *Boxer* 教授による主としてマカオ貿易に関する三部作^⑮はこの方面の研究中の白眉とも称すべきものであり、最近では *Mauro*^⑯ *Van Leur*^⑰の著述、ことにオランダの国立古文書館員 *Meilink-Roelofs*^⑱の研究は常にポルトガル貿易のみならず、十六、七世紀の東南アジアのヨーロッパ貿易が現地社会に対してどのように影響を及ぼしたかを興味深く論じた好著といえよう。これらの研究と共に関係重要史料で英訳されるものの刊行も注目してよい。古くは、*Hakluyt Society*らによつて *Barbosa*, *Albuquerque* 等の記録が英訳されたが、近年 *Tomé Pires* の東洋見聞記^⑲や *Gaspar da Cruz*^⑳等の報告が刊行された。

これに対しポルトガル人による研究書は多数あるのは当然であるが、これを一々紹介する事は到底許されないので

他日に譲ることにし、古くは Barros, Couto の名著^②を始めとし、香料研究書としての Garcia de Orla^③の著述等をあげるにとどめる。尚現在 Germano Correia によつて詳細なポルトガル植民史^④が刊行されつつあり、現研究段階を知ることができ便利である。

翻つて日本におけるポルトガル貿易研究は極めて乏しい。戦前矢野仁一博士によつてなされた以後、日本に関し岡本良知氏の精密な研究を除き大きな進歩をみせていない。史料の制約と関係史料の紹介が不十分であつたことも大きな障害となつてゐる。しかし最近研究者の現地調査が次々に行われ、且つ史料もフィルムにより続々日本に将来されつつある。本研究は漸くにして本格的なスタートをすべき時機に入つたと考えられる。

(註)

- ① Boletim da Filmoteca Ultramarina Portuguesa Lisboa 1954〜 一九六二年現在二十四冊刊行されてい
る。
- ② d'Azavedo, P. A. e Baião, A. O Archivo da Torre do Tombo Lisboa 1905
- ③ Silva Marques, J. M. da. Arquivo Nacional da Torre do Tombo I Index Indicium Lisboa 1935
- ④ 本書中に掲げられた文書群だけでも五百八十四に上つてゐる。
- ⑤ トルレ・ド・トンボ文書館所蔵モンズーン文書——日本関係(史淵五十八輯)
——極東関係(九州文化史研究所二十五周年記念論文集)(尚本文書写真は東洋文庫に架蔵されている)
- ⑥ Bulhao Pato, R. A. Documentos remetidos da India, ou livros dos monções.... 5 vols, Lisboa

1880～1925

十六世紀における貿易文書については

Cunha Rivara, J. H., *Arquivo Portuguez-Oriental*, 6 vols Nova-Goa. 1857—1876.

が重要史料を収めている。本書は東洋文庫にも架蔵されているが、最も関係の深い Fasciculo 5 の三冊は欠本であり、私はリスボンの国立図書館所蔵本をマイクロ写真に収めてこれを補充した。

⑥ 本文書は全部で六十三冊、内十三冊は日本関係であり、他は中国及びインドシナ関係文書を含んでいる。49—W—49—W—11 の番号を附す。

⑦ Cardozo Bethencourt, *Bibliothèque Royal d'Ajuda*. *Catalogue des manuscrits* (タイプ刷未完)

⑧ “Medidas de peso de mercadorias em Malaca, e China comprados com as de Portugal 1500 a 1608” この外、同図書館架蔵関係文書のリストは省略。

⑨ エボラの図書館の関係文書検索には次の目録が便利である。

Cunha Rivara, J. H. da. *Catalogo dos manuscritos da Biblioteca Publica Eborense*, Lisboa 1850
日本関係については岡本氏の「ぼるとがるを訪ねる」の該記事に掲げられているが、その他「アジア」「セロン」「マラッカ」「シヤム」「マカオ」「中国」「モルッカ」「ティモール」等の各部門には関係文書収められているが内容は略す。

⑩ Whiteway, R. S. *The Rise of the Portuguese Power in India, 1497—1550*, London 1899

- ① Danvers, F. C. The Portuguese in India, 1481—1894. 2 vols. London 1894
- ② Ljungstedt, A. A Historical Sketch of the Portuguese Settlements in China, Boston 1836
- ③ Montalto de Jesus, C. A. Historic Macao. Hongkong 1902
- ④ Boxer, C. R. Fidalgos in the Far East, 1550—1770, The Hague 1948
- ⑤ *ibid.* The Great Ship from Amacon, Annals of Macao and the old Japan Trade, 1555—1640
Lisboa 1959
- ⑥ *ibid.* Macau na época da Restauração, Macau three hundred years ago. Macao. 1942
- ⑦ Mauro, F. Le Portugal et l'Atlantique au XVIII^e siècle 1570—1670, Paris 1960
- ⑧ Van Leur, J. C. Indonesian Trade and Society. the Hague 1955
- ⑨ Meilink-Roelofs, M. A. Asian Trade and European Influence in the Indonesian Archipelago,
1500—1630. the Hague 1962
- ⑩ Cortesão, A. The Suma Oriental of Tomé Pires. 2 vols. London 1944 (Hak. Soc.)
- ⑪ Boxer, C. R. South China in the Sixteenth Century. London 1953 (Hak Soc) 所収
- ⑫ Barros, J. de Da Asia, Decadas I—IV.
- ⑬ Couto, D. de " Decadas IV—XII.

最近アンタム (Antônio Baião) の解説による抜萃本が刊行された。Barros 第四冊 Couto 第十一冊

刊行中。

① Garcia da Orta, *Coloquios dos simples e drogas da India*. 2 vols Lisboa 1891~5

② Germano da Silva Correia, A. C. *Historia da Colonizacao Portuguesa na India*. Lisboa 1948~
(1962年6冊で刊行)

附記 尚本註に記入した論著は参考までに掲げたものであり、重要なもので省略したものは少くない。本講に関する詳細な Bibliography は機会を得て発表するつもりである。(一九六三年九月後記)

于闐から雲崗に至る間の仏教美術にみられるヘレニズムの諸要素

アンネマリエ・フォン・ガベイン

ガンダーラの仏教美術及びその背景となる思想の展開に関しては、A. Foucher, A. Grünwedel の手によって探究がなされました。そしてこのガンダーラ系の美術が、後の時代になつて中央アジア及び東アジアに伝存することが A. von Le Coq, 日本の水野清一、長広敏雄等の諸学者によつて明らかにされたのであります。アフガニスタンの北部のボハラ、ソグダイアナ、フェルガナ、それにカシユガルも含めてよいかと思ひますが、これらの地域にあつた国々に関してはまだ充分な研究もなく、資料もいままに過ごされてきました。タリム盆地を通つて東方の中国にいたるキャラバンは、最も近道である于闐 (Khotan) を經由する「南道」か、または龜茲 (Kucha) をとおる「北道」すなわち「天山南路」によつたと思われませんが、いまこれらの地方における考古学的遺跡、出土品を調べてみると、

不思議にも南の方に、よりヘレニズムの（ギリシヤ的）要素が強く、北の方がかえつてインド的な色彩が濃いという事実にぶつかるのであります。私達の考察は、その第一歩で早くも、地理的遠近から推測される常識的予想が事実と反し、事実によつて覆えされるのを見なければなりません。

かかる事実に關する私たちの知識は、中国側の史料によつて補われなければなりません。そして(1)いつたい如何なる地域からかかるヘレニスティックな要素がもたらされたのか、(2)東方の中国に到るまでの諸国で、この要素は如何なる方面にあらわれているか、(3)かかる文化に實際接していたのはどんな人たちであつたか、(4)何時、そしてできれば何故に、かかるヘレニスティックな要素が抽出されて伝承され、飛地的な存在を形成することになつたのか、などの点を考察したいと思います。

紀元三五年にカーブルの溪谷に定着していた（アレキサンダー大王の）後継者諸王国の最後のものがついに滅びております。しかし、その後も、ギリシヤ人及び彼等といつしよに西方からきていた芸術家たちはバクトリアに居残つておりました。（以後私がヘレニズムにふれる際には、場合によつてはずつと後の時代になつて、多くはネストリウス系のキリスト教徒、すなわちシリヤ語とか、ソグド語をはなし、メルヴに宗教上の中心を持つ人々たちによつてもたらされたビザンチンの要素をも含めてヘレニズムと申しておりますことをあらかじめ申し上げておきます）

北西部インド、アフガニスタンに存しますガンダーラの仏教文化は、四世紀から、以後エフタルによつて破壊される四五〇年まで盛えたものであります。パーミヤーンの大石仏は、インドのアジャンターの石仏に範をとつてつくりあげられたものであります。ガンダーラでは比較的初期においてはヘレニスティックな要素が支配的でありましたが

のちになつてインド的な要素がこれに混入し、さらに時代が降つてからは、ここからもつと北方の国々にかけてインド人の活躍の復活したことが注目されます。

グプタ朝の美術は、三七五〜四九〇年にかけて西北インドに栄えましたが、インド人のあるものが于闐におわれました。そして西のヤールカンドから東の樓蘭にいたる南道一帯に住んでいたものはこれらインド人の子孫ではなかつたかと考えられます。これらの地で発見されているヘレニスティックな封泥は三世紀以後のものと考えられます。

しかし、于闐では、インド文字の文書ばかりでなく、サカ族のものも発見されております。その使用言語は、中期イラン語であり、ドモコの近くのマザール・トグラク、ミーラーン、ファールハッド・ベク・ヤイラキ、カラ・ナンタグ及び敦煌等の東トルキスタンの諸地、それにマルラ・バシの南のマザール・タグのような北トルキスタンの地において、約七〇種ほどの文書が発見されております。(Serindia III p.1289)

これらの住民の言語、及び支配階層の言語は、サカ語であつたにちがいないと考えられます。もつとも于闐及びマラル・バシでは時代によつては、中国またはチベットが支配したこともあります。マザール・タグでは、チベット文書や七五八年以後の中国硬貨が発見されております。この地は、七九一〜八六〇年チベットの支配がつづき、以後ウイグル王国となつたのであります。

サカ族とは、中国の史家のいう『塞』と同一であると考えられます。紀元前一七六年に塞は月氏に追われて、甘肅省の北部からイリ溪谷に、さらにはソグデアナからバクトリアへと移動いたしました。北のマラル・バシのサカ族がこのようなサカ族の南下以前にすでに、その主流から分かれてしまつていたものか、または南下したサカ族が于闐

から北に再びもどつたものであるかに関しては、イラン学者の間で論議されています。

月氏族からは有名な仏教王朝であるクシャーナ朝が起りました。カニシカ王がこの王朝でもつとも強力な支配者でありました。

南道に存する、于闐、ニヤ〔尼雅〕、ミラーン、楼蘭はすべて比較的ふるい国であり、ヘレニスティックな要素を強く示しております。その初期においては、インド系またはイラン系の人たちが住んでおりました。ニヤには、三世紀にさかのぼる寺院がいくつかあります。その中国の駐屯軍には大月氏の兵がいたことが明らかにされております。ミラーンの考古学上の遺跡は、三世紀から四世紀のものと同時代づけることができましょう。楼蘭はクロライナというインド名さえもつており、楼蘭とは、この *Kroraina* という語の音写ではないかと考えられております。この地で橘瑞超師は西暦三二四年に時代づけられる漢文文書一点を発見された。ほかに漢文木簡、初期ソグド語文書も見されております。仏塔一基と仏寺の跡もいくつか存し、その古来の様式を踏襲した装飾要素は、西方の仏教文化との交渉のあつたことを立証しております。数の上で漢字文書をはるかにこえているのは、カロシユティー文字で書かれたインド文書であり、これは、この楼蘭から、南道一帯にかけてみいだされております。楼蘭では皮のサンダルまで出土していますが、これはインドにはもちろんあつたものですが、北道の高昌国では使用されていなかったものがあります。

楼蘭から東へと眼をうつしてみますと、敦煌はいささか時代が下つたものであります。そしてその初期から、中国文化でありそれが常に異種の外国要素と平行し、混存していることに注目しなくてはなりません。その千仏洞には、

古いものには、インド的、ヘレニズムの、またイラン的要素が存し、より後代のものにはチベットの要素が存しますが、常に主流をなしているのは、中国的要素であります。この石窟は、四世紀の中頃にはじまり宋代にまで製作はつづけられました。

同じく〔今日の〕甘肅省東部にある麦積山の石窟は西暦四〇〇年以前に構築がはじめられており、ヘレニスティックな要素を多分にもつております。一番、東端にあるのが山西省の雲崗石窟であります。拓跋氏の北魏王朝時代の作で、そのはじめの五窟は、四六〇年に曇曜により開くつされたものであります。その巨大なる仏像は、おそらくは Gupta 様式のバーミヤンの三五メートルの石仏を模さんとする意図の下に作られたものでしょう。この雲崗の目をみはらせる石仏に顕著なのは、ヘレニスティックな要素であります。北魏王朝が遷都して新首都洛陽の近くに築いたのが河南省の竜門石窟であります。これにはすでに中国化された傾向がみられます。雲崗の石仏群に関しては水野清一氏、長広敏雄氏が明快に指摘されていますように、釈迦牟尼仏単独で、または多宝仏を脇に配し、無数の諸尊・諸天に圍繞された釈迦仏という、同一のテーマがふんだんにくりかえされていますが、これは、クチャの窟寺の例にみるような、仏陀の本生譚（仏伝）を連らねて教訓するような絵ときものがたりのものと異なり、いわば仏に對する一つの巨大な讃歌であり、わきあがる仏の御名を称える称名の合唱であるといえましょう。正法 *Saddharma* を説き、それを聴くよるこびが、諸仏、菩薩、羅漢、諸衆の表情にあらわされております。

拓跋氏のつくつた北魏王朝とは、異民族の胡族の王朝であります。彼等は何らかのアルタイ語系の言語を話し、仏教に帰依するようになってからまだ日も浅かつたのでした。ですからとりわけ熱つぽく仏教文化を高く発達させるこ

とに心をくだいていたのでしよう。北魏に隣りする涼州には、匈奴の沮渠氏をつくつた王朝である北涼があつたのでしたが、拓跋魏はこの国を通じて中央アジアの文化を多くとりいれようといたしました。ソグドを通じて行つた彼等の交易は、サマルカンドにまでおよび、西の果ての国々との交渉が生まれました。四三九年には拓跋魏は、この小さな辺境国家を滅し、三万戸を新らしく遷都した洛陽に強制移住させております。そして四三五年以後には、西に向けて北魏の天子は二十度にもわたつて使を派しており、当時強力であつた烏孫にまでこの使は至つております。このようにして北魏は西方諸国との直接の交渉を持つにいたつたのです。かつての楼蘭だつた鄯善の征服や龜兹国征伐がなされ、タシユクルガンやソグド、罽賓などのパーミル以西の諸国からまで拓跋部の北魏朝廷に朝貢がなされていたことをしることができます。遠くセイロンからまで二人の比丘が仏画（あるいは仏像かもしれませぬ）をもたらしたともいわれています。しかし、この仏教に対する熱のいれかたも度をすごしたようで、その反動として四四六年には、仏教はまつたく禁圧されます。多くの僧尼が還俗させられました。もつとも、この廢仏運動は六年しか続かず、四六〇年には前にもふれましたように大石窟寺院の建立がはじめられたのです。

話を西域にもどしまして、二つの北道のうちの一つにある、かつての高昌国すなわちトルファンに目をむけてみましょう。このオアシスの国は何世紀ものあいだ中国の支配下にあつたため、その文化的要素はどちらかといえば中国的であつて、ヘレニステイクな要素はより少ないのです。しかし、そうであつても九世紀以後にトルコ人が支配したことは、この文化を一種特異なものにしています。この地発見の文書は、漢文、ソグド語、トハラ語、ウイグル語でかかれており、これに加えて西夏、シリア、エフタルのものもいくつか存します。クチャ（亀茲）で発見された

文書も、だいたいにおいてトルファンのもと同じ言語のもですが、ただトルコ語ではありません。西暦六五八年から七八七年までこの地は中国の安西都護府の中心でありました。この諸仏や諸天、諸尊者の像は、ヘレニステイックな裝飾要素に加えてどちらかといえばインド的な裝飾の要素を保っております。

時代から考えてみてこのクチャという辺地の美術は、これをヘレニステイック様式よりも、グプタ様式のつよくなつた第二期ガンダーラ芸術から流れこんだものと考えなくてはならないでしょう。しかしたとえば、供養者像にみられるこの時代の人物の描写にも、インド的手法へのかたむきはみられないのです。すなわち半長の上衣をつけ、帯にはそのない長剣と幅広の短剣といった騎士像は、どこか雲崗石窟の拓跋の貴人像に似かよつています。江上波夫教授は、服装のちがいは時代の差からくるもので、民族のちがいはないのではなからうかとの示唆をなされましたが、この点については、さらに研究をすすめなければならぬと思います。その騎馬民族的服装とか武器と共にクチャの貴人像の顔の表情はうつろであることが印象的です。すなわち口は小さく眼には表情が欠け、鼻はせまい。その態度はキザでごてごてしていて、およそ諸天や聖者たちの絵にみられるたたずまいとはかけはなれております。このことから、いわばインド好みに対する反感の表現を読みとることができる、といつたらあまりにも大胆にすぎるでしょうか。

以上のことから次のような結論をひきだすことは妥当と思われます。すなわち、ヘレニズムは、仏教の東漸にあつて、その初期においては有力な要素であります。後のある時代にいたつて、これはインドのグプタ式要素と混じつてしまいました。これと同様に、仏典を訳する翻訳三蔵たちは二世世紀から五世紀にかけてガンダーラ及びその北隣の

周辺の諸国から東漸しました。そしてこれに伴つて芸術家たちも北上、東漸した可能性が考えられます。この際、拓跋魏の勢力と、その仏教に対する熱の入れかたが、彼等を招きよせるのに力あつたと考えられます。

美術の面においてはインドの要素は、はじめにヘレニステイックな要素といつしよにはいつてきました。しかし、インド的なものはインドの仏教經典を絵画・彫刻で表現したいろいろな浄土変相図の形で再度もたらされたにちがいないと思われまふ。

つぎに、仏陀や聖者その他の人物の像について、いささかのべてみたいとかがえます。インドの仏教徒は人格 (Ātman) 我の否定——すなわち無我説にあまりにも深入りしすぎていたようです。その結果として、仏陀の肖像なりましたがたをえがくというような意図をもつておりませんでした。また *Adibuddha* (本初仏) をなにかの形にあらわすなどとは考えてもみることにはなかつたと思われまふ。しかし、ヘレニステイックな仏教徒が仏像製作の活動をはじめたのです。ホメーロスの時代には最高存在として (神) の觀念はまだいだかれていなかつたようです。むしろ神とは擬人視して考えられていました。ソクラテスやプラトンは、神について、いくらか純粹な考え方を展開させました。そして新プラトン学派の哲学者やグノーシス派の人々がギリシヤ人の神に対する考え方を著しく深めたのです。このような精神面での発展に加えて、仏教に改宗してまもないクシヤーナ王朝が熱をいれたこともありまふし、また、近接するイラン人のもつ視野の広さからうけた刺戟もありました。

パーミヤンの巨大な石仏は雲崗の曇曜の開さくにより建立された五つの石仏同様、ヘレニステイックな要素を背負つた Gupta 様式のものですが、昔日の美しさはあらわしえないようです。というのは、他のもつと小さくて保存の手

のとどいてゐる彫刻よりは、時の経過からうける損傷がひどいからです。仏陀及び菩薩像の中でもつとも感銘のふかいものは雲岡石仏、及び麦積山の石仏のもつと小さなものに求められます。なにか歓喜をあらわすようなやさしさ、苦や貪欲を超えた美しさ、思考に沈潜し、かといつて決して無意識無感覚に流れたのではない態度の中には最高創作品としての価値があります。そしてこれは中国にもたらうけつがれていたものでもなく、ギリシヤ人世界にあつたものでもないのです。これは、ヘレニズムとインドとそして中国北部の外国人芸術家の間の一つの共通の精神的つながりの中にはじめてできあがつたものなのです。一見したかぎりにおきましては、これらの作品はヘレニスティックな要素の多い外観をいたしております。アポロやディオニソスの像がそうであるように、髪の毛は束になつており、鼻から額は一つの線をなしており、口は、いささか曲線である。長衣にはヘレニスティックなひだがあります。

しかし、その深い落ち着きとともに、次第に顔がより東洋化してきている。眉が高くはり、口は平らに糸をひき、眼は杏仁型になつてゐる。中国のより古い時代の作品には、かかる例はみいだせないし、またこうした表現を目指すこともなかつたのです。古い中国の作品に描かれる人物は、個性をもつてあらわされないのが常であります。つまり、ただあるしぐさをあらわしているだけの役者のようなもので、個性を欠いてゐます。

漢の墳墓の画像石などには、よく亡くなつた高貴な人と彼に供える飲食や音楽、舞踊、狩、角力などがよく描かれています。これらはこうして供えてこの人の死後も常になぐさめ楽しませんとするものかもしれません。またはその人の葬儀の際にはかくも盛大な供養がおこなわれたのだということを示すものなのかもしれません。

これに対して雲崗、または麦積山のヘレニスティックな彫刻においては、歡喜がまったく印象的な表現のしかたであらわされています。ですから、早い時代の仏教美術におけるヘレニスティックな要素をとりあげる際には、ただ単に仏の髪型すなわち *usnisa* の変遷等を指摘するにとどまることなく、上にのべたような宗教的活動における精神的力の結晶といったものをみなければなりません。後の時代になつて仏師たちのうちには、ときとしては、仏の顔をきびしい、厳肅なものとして描くことを好むような点もありましたが、雲崗・麦積山の石仏をつくつた人たちはなにか非常にやさしいほほえみを通じて、生々とした慈悲の行いをあらわすことに、また宗教的情熱のほとぼしりをすらあらわすことに成功しているのです。

もちろん、すべての顔、衣裳どれもがみんなおなじ程度にヘレニスティックであつたとはいえません。同じ一つの彫刻の中にも意味深いちがいの存することを讀みとることができます。たとえば、文殊・維摩問答図です。文殊菩薩はギリシヤ的な顔立ちをしています。でも維摩詰居士の顔立ちは今くちがいます。しかも、仏や菩薩と、居士とのちがいをきわだたせんとするかのようには、維摩は北魏拓跋の人々のかぶつた三角帽子をかぶり、とんがつたあごひげを生やしてえがかれています。このあごひげは拓跋の人々の間にはありません。おそらくひげは、彼等の間では重んじられていなかつたものと考えられます。このことから、次のことがわかります。すなわち拓跋の人々にとつて、また雲崗をつくつた拓跋の仏師たちにとつては、ギリシヤ的容ぼうということが、美とか威厳とか、超人性を意味していたのです。仏陀の大弟子の図 (YK. XII, 127C) には半ばギリシヤ人的であり、またすでに半ば中国人的な容貌がみられます。しかしインド人の顔立ちはありません。つまりインド人の顔だちは拓跋の人々の考える「美しい顔」とは

どうしてもむすびつかなかったのです。

釈尊降誕の図 (YK. III. XX) は釈迦牟尼の母である摩耶夫人とそれにかしづく官女たちは、どちらかといえばギリシヤ人的に表現されています。しかし木立はインド風にかかれています。クチャの絵画にみられるような婦人の丸い胸の線はインド的な好みに合うものなのですが、ここでは全くのぞかれてしまっています。ミラーンの人々は人物を描きかける際にこれとは別の原則を立てていました。(Ser. Bd. IV. T. XV) 天使たちの姿は、中国風の立体的な肉づけをしめす線をもつて描かれています。しかしその顔だちはまだヘレニスティックなもので、天使と土地の間とのちがいをきわだたせる役割をはたしています。クチャの場合には金剛夜叉 (Vajrapāni) までがヘレニスティックな顔だちであらわされています。(Kultstätten s. 45)

タリム盆地の彫刻は、しばしば長い間、保存されていた塑像用の型に流しこんでつくられているため、絵画の場合よりもその形は保守的で古い形を伝えています。そしてこのため北道一帯にわたつて、また南道の場合にはもちろんのことですが、カールしたヘレニスティックな頭や、ヘレニスティックな鼻、大きな眼などの彫刻が発見されています。(カラシャール、マラルバシ、トムシュック等)

雲崗の場合でも、最高の聖者はどちらかといえば、ヘレニスティックなあらわしかたで、中国人の仏師たちにとつては異国的な顔立ちで表現されているのではないかと思えます。もちろんそうすることが中国人の彫刻家の希望ではなかつたでしょう。しかし文殊・維摩問答図の例が示しますように、このような早い時代にあつてはギリシヤ的な容貌が、聖者の理想なタイプとされていたのです。仏陀の方が長い間、ヘレニスティックなきまりを残しています。

菩薩像の方がより早く、その土地の好みに合わせて変えられてゆきました。これらの像には、やさしき、気立のよさがあります。そして個性にあふれています。ところが中国の作品にはこのような性格はめつたにあらわされません。

麦積山石仏の脇侍仏、菩薩が、後の時代になつて中国の美術にみられる、たとえば、十王経図絵にみられる王にかしづく男女二人の小姓にあらわされるようになり、または、法隆寺の有名な聖徳太子尊像における太子によりそつた二人の童子に変容していつたのだとみることはできないでしょうか。

後の時代になつて、ヘレニスティックな要素への傾倒が衰えをみせますと、高昌や亀茲の菩薩は諸天部の像がそうであるように個性をぬきにして描かれるようになりました。

もう一度、雲崗・麦積山にたちもどつて、バラモン像といわれている苦行者像をふりかえつてみましょう。こここのバラモン像はまつたくガンダーラのものに似ております。なに一つあたらしい特徴はくわえられていません。多分おそらくは、中国人にしても、北魏朝をつくつた拓跋部の人たちにしても、彼等はこういつた人物を実際にみる機会がなかつたからでしょう。インドのジャイナの *Nirgrantha* (裸形派) のように、これは裸で、髪は頂上に束ねており葦で編んだ椅子にかけています。その顔の表情は大変はつきりと性格をよく表わしています。偏狭で不寛容、自分本位で他人に対すると同様自分に対してもきびしいといつたものです。後の時代になつて高昌国のウイグルはこういつたバラモンの表情を変えてしまい、ほとんどひやかし半分といつたほどに戯画化してしまつています。

このような像とは全く対照的に、禅定中の僧のすがたは、まつたく中国人的に描かれています。頭から衣をかぶり、虚心な面持ちはまつたく中国人のものです。高浮彫りか、または線でかかれています。このことから、次のよう

に考えることができるでしょう。土地土着の彫刻家はこのような人物に実際に接する機会があつた。そこで、彼等としては彼等なりの独自の手慣れた画法で尊敬の意をこめてあらわしたのだと。

一方降魔図の中で釈尊の成道をさまざまげる魔王 (māra) の軍勢はヘレニスティックには描かれていません。画家の目には彼等 (悪魔) は醜悪であるべきものに映つていたからでしょう。これらの悪魔は、短かい腰布をつけているだけです。しかし釈尊を誘惑しようとする四人の魔女には、拓跋の高貴な婦人のりっぱな服装をさせ、魔王には魏の貴人の服装をさせています。

東方、北方、南方の諸国全体において比丘は、年取つて描かれることも、若く描かれていることもあります。その原型はガンダーラにあるとさえいえるでしょう。(A. v. Le Coq, I, 7)

きわめて典型的な特徴をしめすものに衣のひだのあらわし方があります。バーミヤンの巨大な石仏のひだのつけ方が、中央アジア・中国一帯にかけての仏師に影響を与えたものと考えられます。しかし、これは、いくつかあるうちの一型式にすぎないのです。ヘレニスティックなひだのあらわしかたには、(1) 古典的な神聖感のある、きちんとしたあらわしかたのもの。(2) 動いているかのように描かれるもの、(3) 中国人が「曹衣出水」の画風とよぶような、水の中からでてきた人のように体が透けてみえるような描き方です。絵画では、ひだはかげであらわされるか、または中国式の画法にあるようにただ線であらわされます。

もし、画家たちがこういうひだの描き方をいくつか知っているとしたらなにか意図をもつてこれらの使い分けをするということが考えられるでしょう。ベゼクリクのウィグル時代の誓願図では、仏の衣のひだは、みんな陰影をもつ

てかかれ、線画でかかっているひだは二つだけでありますが、とりまく羅漢たちの衣のひだは、時たまは陰影をもつてかかれますが、大部分は線であらわされています。ですからこれをかいた画家たちにとつては、陰影をもつて描くことが荘重で重みがでると考えていたのでしょう。

敦煌の捨身飼虎図では、なげきかなしむ王妃は、陰影をつけて描いた長めの衣をつけており、かしづく官女たちは、上体を、薄いひだなしのものでまといほとんど裸にみえます。

キジル (Kulstatten s. 125) 千仏洞では高い位の人はヘレニステイックに、典型的なひだづけとたれひだのついた衣裳をつけており、同じ絵の中でも他のものたちは土地の着物をつけています。これらの絵の構図はインド的です。ります。

〔建造物〕 浮彫りや絵画から、どんな建物が中央アジアや中国で好まれ、仏寺仏堂としてふさわしいと考えられているかをすることができます。インド式の *stupa* はなかなかの早さで、中国風の仏塔に変容していったのです。

クチャや早い時代の高昌にはイラン的な特徴である半球天井、切子燈籠形天井、銃眼形凹凸のついた障壁があります。

南道では、楼蘭のような大変古い地には、アカンサス葉飾やうず巻装飾のついたインド・コリント様式の柱をみることができます。

仏像をおく壁がんに關していえば、インド式の丸いアーチ型が、クチャでも南道と同じく好んで使われていますが、雲崗ではガンダーラに由来する型が一般的であります。そして、この建築様式上の要素は円型アーチ型のように

高く上につきでることなく、後の壁面におしつけられてしまっています。(Le Coq, I, T. 10)

中国には、中国式の建築がすでにこの国に適した形で発達いたしておりました。しかし雲岡、敦煌、高昌に関して云うかぎり、非常に多く外国の様式をとり入れているといえます。

多くの浮きぼりの中に、非常にこまかく細部にわたつてかかれた装飾的な中国の屋根をみいだすことができます。中央には鳳凰、一番高い梁には鷓尾がついています。

しかし仏をおく台座はヘレニスティックなものであります。これは中国にはガンダーラ式をこえるようなものがないからでしょう。

光背はアレキサンダー大王時代の星の神に由来するものと考えられます。しかし、この光背が雲岡で、非常な発達をみせていますが、それはもはやヘレニスティックなものではありません。ここでは仏陀をとりまく *Parivara* (眷属集会) がくみこまれています。あるいは、仏陀の慈悲の光の中に多くの人を浴させたいという宗教上の配慮から、このようなことが思いつかれたものかもしれません。

トウルファンの壁面の一つには、悉多太子の騎乗出門の図がありますが、太子には単なる後光だけではなく、その後にもう一つ完全に光の輪が描かれており、騎上の人物に強い霊的な力のあることを強く感じさせます。こういった後光は、バクトリアから発見された四頭立二輪戦車にのるアポロのついでに貨幣にみられたものです。ヘレニスティックな要素が後の時代になつて復興したものといえます。

〔装飾要素〕 ギリシヤ世界からうけつがれた装飾的題材となるものは多くありますが、そのうちのいくつかをあげて

みましよう。

獅子（ライオン）はギリシャでは王侯のシムボルとしており、それはインドにもしられておりました。これは中央アジアでもうけつがれています。たとえば高昌のウイグル王が「獅子王」とよばれていたのです。これと同じことが、ギリシャの *didim*（すなわち、金でできた月桂冠）についてもいえます。これはギリシャやヘレニズムの早い時期のバクトリアにおいてと同様に中央アジアにおいても支配者のシムボルとしてつかわれたのです。

鷲と蛇との永遠の闘争というヘレニスティックなアイデアは（*Kultstätten* s. 21, 35, 54）多くの民族に共通の基本モチーフであると考えられます。なぜといつてこの二つの動物は天と地、天上界と下界という二つの対立的なものをあらわしているからです。ですから中央アジアでこの二種の動物がでてくるからといつて、すぐこれをヘレニズムから借りてきたものとしてしまうことはできません。

トゥルフアンでは、柩をおおう布（柩衣）に、二匹のからみあつた蛇がよく描かれています。この蛇は、上半身が伏羲・女娲になつており、この神が、それぞれ上にのぼしている一方の手には、規と矩をもち、もう一方の手は互いに一つになつている。この二つの神の衣裳は腰のところでせまかくびれています。袖も肩のつけ根ではせまかく、二の腕のところではずつとひろがつています。上衣も裾口ではひろくなつています。これはまさに西魏時代の浮彫に見える服装です。

ですから、このシムボリカルな絵とその発想は、中国から中央アジアに六世紀のはじめに、もたらされたものでしょう。これとおなじ題がすでに漢の墓室にあらわされており、また「淮南子」にのべられていることから、これが

中国起源であることはうたがいありません。しかし江上教授から御教示いただいたことですが、上半身の人間でないからみあつた二匹の蛇は、南満洲の通溝の高句麗時代の墓室の壁画にもみいだされます。またこのおなじ二匹の一對の蛇は楼蘭で(Inernost, XXX)で、壁掛の中におりこまれているのを見ることが出来ます。そして、それにはいつしよに絶対にビザンチンの人間と思われる人物がえがかれているのです。これは、西方からの刺戟のもとにつくられたものです。ですから、この二匹の蛇という要素は、西方にもまた東方の中国にもあつたのでして、どちらとつてその発生の地を定めることはできないのです。

天界のよろこびというものは、仏教の壁画や浮彫においては仏陀に散華をなし樂器を奏で空中に舞をまつている飛天のすがたによつてあらわされています。これは、人物であるというよりも裝飾的要素とみる方がよいでしょう。飛行、空を飛ぶということについては早い時代からすでに中国ではあらわされている。しかし、あまりうつくしいものではなかつた。雲崗に非常に典雅で美しい飛天が描かれているのは(III, 148, I, 148, 173, 194, 201, oK, 17 m. o., 180; 麦積山 T 27; 雲崗の南のもの III, 195, 197, IX, r. o.)、ヘレニスティックな作品であるといえるかもしれない。正倉院にある、いくつかの胡瓶についてはそれがヘレニスティックなものであることが、原田淑人氏によつてつきとめられています(Memoirs RDTB, No. 22, p. 55~78 1939)。干闥(Le Coq, I, 45)でも、敦煌でも(T. 19)同じような水差しが発見されています。

おそらくは、西方の国からこれらの水差しは贈物としてたらされたものでしょう。このような作品が中央アジアで作られたのかどうかについては、はつきりすることができないのであります。

Allouche-Le Page が指摘しておりますように、バクトリアでは、長い椰子の小枝は、勝利のシンボルでした。中央アジアでは茨の長い花や蓮の葉が手にもたれていたり、またはある人物の胸もとに近く描かれていたりしているのは、このより起源の古いヘレニスティックなシムボルと同様の意味でしょう。そしておそらくは宗教上の勝利を、また立派な行いをなして生涯をおえたことをしめしているものと考えられます。雲崗 (IX, 35, B) にある、笛を吹く牧羊神は全くヘレニスティックな半人半獣であります。これは、全然中国の仏師たちにしられていなかったわけではなく、この他にも同じような琵琶をかんでいているものがある。(T. 38)

人像柱も中央アジア・中国に対応する例をみることができます。ガンダーラのものとは、外見がちがつてきていますが、その発想、アイデアというものは同じです。すなわち地下の国の生きもので、ある場合には自分から進んで、ある場合には苦しみをめきながら、尊いおかたを支えているのです。ある場合にはものを捧げていることがあります。場合によつてそれが柱だったり、蓮台(蓮華座)だったり、えらい人の御足をかかえていたり、またはそういった人の馬の足をささえていたりします。この馬を支えるという発想は、トゥルフアンの洞窟壁画によく描かれています。これが首のみじかい大きなつぶらな眼をした小人であることが多いのです。

最後にもう一つ、ヘレニズムと中央アジアの平行関係をしめす例をあげましょう。誓願図のあるものには二人の大変似かよつた、古代風の、むしろパルティア(安息)風の鎧や、豪華な服装をした人物があります。ちよつとよく注意してみれば二人のうち一人の方が色が白く、他方が黒いことに気がつくでしょう。色の白い方はズボンをつけておらず、フロックをきています。あきらかにこちらが女なのです。ここにはおなじような絵にバラモンや、商人がかか

れていますから、察するにこの男の方はクシヤトリアではないかと思えます。するとこの女の人は彼の妻ということになります。でもこの女の人が夫とほとんどおなじ服装をしており、まったくおなじような態度をしているのは何か意図があつてのことにちがひありません。バクトリアからゼウスのかたわらにいる女神アテナが描かれている貨幣が出土していますが、この二人がまったく同じようなのです。

ウイグル時代の、すなわちかなり後の時代のものになるわけですが、高昌の壁面にバクトリア出土の貨幣との対応がみられることについては、ソグド人を通じてよい古い時代の伝説が伝えられ、それがウイグルにまで達したということを考えることもできましょう。そしてこのことは、ウイグルの *nomos* であり、これが中央アジアにはいつてウイグルでは、仏教の根本思想の一つをあらわす名称となつた例と同じ様な意味を示しています。

さいごにまとめてみますならば、この講演で述べたいと思ひましたのは次のようなことなのです。西域の西の端の文化の諸要素がどのようにして、中央アジア及び中国に達したかということであり、途中で変容し、拡張せられあるものは受け容れられ、あるものは捨てられ、あるものは役に立つた。あるものは、東方の世界自体に全く同じものを見出すことになつた。「このような場合には、発生地を決め難い。」ほとんどすべてが断片にすぎず、一片の屑切れしかない場合もあります。でもこうして手にはいる作品をつかつて、それらの屑切れや破片がそれなりに自分の言葉をもつて私たちに語りかけてくるものを聞きとろうとしてみたのです。

(訳 川崎信定)

ルイス・フロイスの「日本史」と「書翰」について

松田毅一

一五六三年より一五九七年まで三十年余り在日したイエズス会士ルイス・フロイスは、その一三七通の報告書と、ことに晩年の大作「日本史」により日本文化史上不滅の光彩を放っている。

「日本史」の写本は、二十世紀になつて、ポルトガルとフランスで幾種類が発見されたが、その構成については定説がなく、或いは「日本史」前後篇、「アパラートス」前後篇、或いは、「日本史」第一、二、三、四部作と称せられ、「天正少年使節行記」も、フロイス「日本史」の一部であるといわれている。しかし筆者は、フロイス自筆の書翰と現在する諸写本、及び、この十八世紀の写本作製者であるモンターニャとアルバレスの企図の三点から「日本史」の構成を再検討し、フロイス「日本史」は、二部三巻で、一五七八年までが第一部、一五九三年（或いはそれ以上）が第二部で一応完成した原稿があつた筈であること、一五六六年、一五八三年、一五八八年で写本が新たな巻に切かえられているのは全く十八世紀の写本作製者の意図であつて、フロイスの意図とは無関係であること、「使節行記」は、フロイスの「日本史」の一部とは思われず、フロイス編と断定する根拠はまだ認められないであろうとの見解である。

アパラートスというは、「マカオ司教区史」或いは「日本司教区史アパラートス」で、「日本史」のアパラートスではなく、一五六六年、一五八八年の写体の開始は、マカオ司教区と日本司教区の開設という事情によるものと思ふ。

フロイスの著作と書翰は「教化的」「報告書的」な性格のもので、教会史の史料としては重視すべきものではない

が、日本歴史の史料としては、詳細な点、日本個有名詞が豊富な点で拔群の価値を有すると認める。

〔参照 拙稿 ルイス・フロイス著『日本史』の構成、写本並び内容一覽(日本歴史第一九〇号)〕

ランダルマの子孫について

佐藤 長

チベットの古代王朝はランダルマ王 *Glan dar ma* の死を以て終り、その後は諸侯が分割割拠する中世へと移行することになる。しかしチベット史書では、中世は寺院勢力が方々に起つたことが述べられていても、諸侯等の活動は何等記されていない。古代王朝の子孫についてもチベット史書には、その系譜は記されているが、相互に異同があり、対照すべき史料がないためにその信憑性は疑われている。これをできるだけ歴史的事実へと引戻すのが本講の目的である。

チベット史書のうちで最も信頼性の高いのはケーパーガトン *Mkhas pañi dgañ ston* であるが、これによつて系図を作成すると、ダルマの二子ユムテン *yum brian* とオェスン *Hod srun* 及びその子 *ルルツェン Dpal hkor btsan* はその紀年がはつきりしており、ラルー女史 *M. Lalou* の整理した敦煌文書によつて実在が確められる。それらの子等についてもアツカン氏 *J. Hackin* の紹介した敦煌文書によつて実在は証明される。しかしその後になると対照史料は殆どなくなり、困難な問題が起つてくる。

第一はユムテンの系統であるが、その三、四代の間は一向実在は確められない。しかしその五代目のツアライシー *ギェンツェン Tsala Ye ges rgyal mtshan* とその子のチ *パ Khri pa* は、中央チベットに仏教を復興した「ウイ

ツァンの十人」 *Dbus gtsan gi mi bcu* に關聯して実在が確められる。ところがこのウイツァンの十人の存在年代が人によつて説が一定しない。しかしここではリチャードソン氏 H. E. Richardson の發表した年表を正当なものと認め、それによつてツァラとチパの交代時期は九七〇年から九七八年までの間と決定できる。

第二に、ペルコルツェンの子キデニマツェン *Skyid Ide ni ma ngon* の系統であるが、その四代の孫オエデ *Hod Ide* 及びジャンチュブオエ *Byan chub hod* のとき、例のアティシヤ *Atiça* が招請されるから、一〇四二年頃の西チベットの実在の君主と認められる。しかしその系統は数代経て絶えたらしく、チベット史書には引続きマルラ王朝 *Malla* として系譜を記しているが、この王朝は眞実は別の系統と見なされるものである。

第三は、ペルコルツェンの子タシーツェグ、ペル *Bkra çis brtsegs pa dpal* の系統であるが、これこそその孫のチチュン *Khri chuñ* からヤルルン王 *Yar klun's jo bo* として知られるものである。しかし年代については何等の手がかりもなく、その曾孫ジョガー *Jo dgah* の子ジャサラチュン *Bya sa lha chen* に至つて漸く時代は明確になる。即ち彼はギヤマワ *Rgya ma ba* の第二代オントリンポチュエ *Dbon ston rin po che* と親しく、又バグモドゥ *Phug mo grn pa* を自らのラマとしてゐるから、その実在年代は十二世紀の後半を中心としてゐると考えられる。その甥のジョウオネンジョル *Jo bo rnal 'byor* も十二世紀後半から十三世紀前半にかけてのヤルルン王と考えられる。普通ヤルルン王の系譜はこれ以後も親子相伝で続くことがチベット史書に記されるだけで、その兄弟等については何等述べられるところがない。しかしケーパーガトンによるジョウオネンジョルの子ラルンギワンチュ *Lha lun gi dban phyng* (一一五八—一二三二) はカダム派チルプツ *Spyil bu* (*Lcil bu*) の寺院の第二代の座

主となり、それ以後第六代に至るまで座主はすべてヤルルン王の家から出ている。そのことはテプテルゴンボやカダムパの明燈史等によつても明かに証明できることで、しかも各代の座主については年代や事蹟も明確に知られるのである。

以上によつて我々はランダルマの子孫が、ヤルルンという小地域ではあるが、そこに中世貴族としての地位を確保し、大寺院との結びつきによつてその勢力を保持していたことを知る。いわば古代王朝の子孫は堂々とここに中世貴族として再生したのである。

尤も唯古代王朝の子孫が中世貴族として存在したというだけでは大して珍らしくもなく何処にでもあることである。しかし寺院との結びつきによつて、即ち座主の地位を一家で独占するということが十二世紀の中期から始まつたことは注意すべきである。何故ならばラン氏 Rlans によるバグモドゥパ座主の独占は十三世紀に入つてからであり、キュラ氏 Kyn ra がリゴンパ Hbri khun pa のそれを独占したのは十三世紀になつてからである。ヤルルン王とチルプウとの関係もこれらと同様のケースではあるが、唯中世紀貴族のあり方を多分最も早く示したという点に、その歴史的意义が認められるであらう。

【附記】榎一雄氏の御講演は「東方言」第二十六、第二十七輯に発表せられ、熊谷宣夫氏の御講演は「石田幹之助博士古稀記念東洋学論叢」、江上波夫氏の御講演は「東洋文庫欧文紀要第二十三」に、また宮崎市定氏の御講演は「東洋学報」誌上に、それぞれ発表せられる予定でありますので要旨を省略させて戴きます。羽田明氏は昭和三十九年二月パリ日本文化会館館長として赴任されました。

4 展 示 会

第五十回展示会 昭和三十八年十一月九・十日 於東洋文庫

東洋文庫チベット関係文献(展示目録 一冊 二十四頁)

今回は、東洋文庫において開催される日本西蔵学会第十一回大会に協賛してチベット関係文献を展示することとした。

当文庫所蔵のチベット関係文献は、故河口慧海師がチベットから將來されたナルタン版大蔵經、歴代パンチェンラマ全書などのチベット文献及びモリソン文庫本を主体とするチベット探検記、チベット研究書など、その数はきわめて多く、しかも特色あるコレクションである。その一部はこれまでの展示会において出陳されたが、到底その全貌を限られたスペースに展示することは不可能である。そこで今回は、チベットの自然と文化がヨーロッパにいかを紹介されていったか、その過程の跡づけに資することを目的とし、第一部：チベット探検・踏査の報告書、第二部：チベット語辞典、第三部：辞典編集に関連あるチベット文献、に視点を限り展示文献を選択した。

探検・踏査について、入蔵の経路を概観すると、西はカシミールからインダスをさか上り、南はインド平原からヒマラヤを越え、東は四川、雲南からカムの深い溪谷を渡り、北は青海、トルキスタンからツアイダム、チャンタンを経て、聖都ラサあるいは聖地カイラサを目指した。それぞれの経路により数点、全部で一九点、一七世紀前半西部チベットのグゲに派遣されたアンドラーデの記録など貴重な文献が多い。

辞典については、語学史上欠くことのできないもの一七点。チベット各地の踏査が進むにつれ、辞典の対象もチベット語の文語・口語の諸相に及んだが、一九世紀においてキリスト教宣教師、二〇世紀に入つては英印政府の対チベット外交の衝に当つた人々の業績が著しい。

辞典編集に関連するチベット文献は九点、チベット人自身の作成した語彙集の類、彼らの語義記述法の数個の類型を代表する。おそらく初期の辞典編集において、チベット人の語義記述法は有力な手掛りであり資料であつたに違いない。今日でもチベット語の研究はその方法についての深い理解なしには成果を期しえない。

解説は、第一部、第二部をそれぞれ当文庫チベット研究室の金子良太、北村甫が担当、第三部のチベット文献についてはサキャ派活仏ソナム・ギャムツォ師が選択、解説は同師と北村が担当した。

展示文献は大部分が当文庫所蔵のものであるが、一部多田等観師、ソナム・ギャムツォ師所蔵のものなどを借用した。

5 図書の収蔵及び閲覧

A 資料 室

1 資料 調査

- (イ) 図書選択リスト・カード作成 一三〇〇枚
- (ロ) 通信連絡 一九六件

(ハ) 新着図書目録の発行、和漢書二分冊

洋書(年一〇回)は国立国会図書館「洋書速報」(毎月十五日発行の分)に付載せられている、

2 資料購入

区分	和漢書	洋書	計
逐次刊行物	一九五	五八	二五三
単行本	四一三	五〇六	九一九
複写資料	一	一	二
計	六〇九	五六五	一、一七四

3 資料交換

逐次刊行物	区分		計	寄贈	寄贈			
	和漢	洋書			国内	欧米	アジア	計
新聞	一五一九		三〇六二	内洋書 四六四六	内洋書 八一二	一三七九	内洋書 六八三七	
二新聞	六六二		一〇	三八八一	八一		三九六二	
八		八八一						
新聞			計					
一〇								

4 資料整理(製本)

計	新聞	一八五八	〇	三三九
	二新聞	一四八八	〇	八二六
計	新聞	一五六九	〇	六八八
	一新聞	四九一五	〇	一八五三
計	内洋書	五〇三四	〇	三八八
	内洋書	一一三三	〇	三二二
計	内洋書	一七〇九	〇	三三〇
	内洋書	七八七六	〇	一〇三九

区分	和書		漢書		洋書		計
	依頼冊数	製本冊料	依頼冊数	製本冊数	依頼冊数	製本冊数	
逐次刊行物	一八三〇	二〇七	七〇九	一一二	二〇六	二〇六	五三四
単行本	四	四	〇	〇	二二	二一	二五
複写資料	二〇八	二〇八	〇	〇	二〇八	二〇八	四一六
計	二〇四二	四一九	七〇九	一二一	四三五	四三五	九七五

B 国会図書館支部東洋文庫事業概要

一 図書の入、整理

(1) 洋書目録室

- a 新增架図書整理カード作成 約一、〇〇〇部
- b 既設図書の分類変更とそのカード作成

文庫も齡を重ね、三十余年に亘つて断続的に刊行されてきた大規模な出版物(例えば *Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan* の如き)は、その都度単行本として受入れられていたが、一定数揃つたところで叢書として一括すべきものと思ひ、分類変更を試みつつある。

c 洋書地誌目録作製

完全な形での分類目録の刊行には日子を要するので、それまでの欠を充すため、特定分野に関する在庫リストを作成する。先ず試みとして欧文の旅行記、地誌を編輯した。

A List of Books on Travels and Voyages at The Toyo Bunko. B4. 226 pp. + Index

(2) 和漢書目録室

- (イ) カード作成

a 新排架カード

分類カード 二部 二、五〇〇枚

逐次刊行物カード 三部 三三二枚 追補二二八枚

b 既排架カード補充

- (1) 和漢書目録室用カード補充 一、三〇〇枚
- (2) 閲覧室用カード 八五〇枚
- (3) 近代日本研究室カード補充 八、〇二六枚
- (4) 事務用カード補充 三〇枚
- (ロ) 既排架カード調査・照合
- (イ) 和漢書に関するリファレンス 一四六件
- (ニ) 破損本の修理 一五〇部
- (ホ) 和装本及び帙の題箋書き 五二九枚
- (ヘ) 製本、製帙事務(1)製本六四〇冊 ②製帙一三七帙
- (ト) 東洋文庫蔵地方志追加目録の編集
- (チ) 特殊文庫マイクロフィルム総合目録の編集 カード二、三〇三枚
- (リ) 藤井文庫の登録 五〇点

二 図書の間覧及び考査

- (1) 昭和三十八年度図書間覧状況

(2) 閲覧図書数内訳

月	和書		漢書		洋書		合計	
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数
四	一二八	三七一	三〇四	二、四九七	二九七	四四七	七二九	三、三一五
五	一七五	三八一	三〇四	二、一六七	二七〇	三九七	七四九	二、九四七
六	一九一	四三七	三一五	二、八一七	二二八	五一一	七三四	三、七七二
七	一六八	三七九	六一一	六、一一七	二二八	七七四	一、一五七	七、二七〇
八	二五二	六三二	七四三	八、〇八四	三三九	五一〇	一、三三四	九、二五五
九	二五五	一、〇二七	三六五	三、五七一	一九六	三五四	八一六	四、九五二

月	開館日数	閲覧人員	一日平均	昨年同月との比		閲覧図書数	一日平均	昨年同月との比	
				部数	冊数			部数	冊数
計	二九七	三、五四五		一二四増	五四、九二二		二、三〇七増		
三	二五	一八三	七〃	四六〃	二、五七四	一〇三弱	四一四〃		
二	二五	一八四	七〃	一〇〃	三、二八六	一三二強	一、四五二〃		
一	二二	一八一	八強	一七〃	二、六五八	一一一〃	七三九〃		
十二	二二	二九六	一三〃	一三〇〃	四、三三六	一九七〃	一、五九七〃		
十一	二四	三二九	一四〃	一四〃	五、四七四	二二八強	五七六〃		
十	二六	三五五	一四〃	六五増	五、〇八三	一九六弱	二二六〃		
九	二四	三〇七	一三弱	三二減	四、九五二	二〇六強	二、四〇二減		
八	二七	四九五	一八〃	八九〃	九、二五五	三三三〃	一、二四五〃		
七	二七	四一七	一五強	九七〃	七、二七〇	二七〇〃	三、一一五〃		
六	二五	二七二	一一弱	四〇〃	三、七七二	一五一〃	一、四八八〃		
五	二五	二八二	一一強	九三〃	二、九四七	一一八〃	六九五〃		
四	二五	二六四	一一弱	八九増	三、三一五	一三三弱	一、四〇四増		

考査件数 一八〇件

閲覧票発行者数 二三二名（一八一七―二〇四七）

6 資料複写

資料複写事業には、東洋文庫がみずからの所蔵資料を一層充実せしむるための、図書収集事業の一環をなすものと、広く内外研究者・研究機関の閲覧・利用の便に供するために資資料複製サーヴィスとがある。前者については研究活動との連関においてのべる。後者については、本年度実績は左記の如くである。

資料複写サーヴィス

マイクロ写真真複写

計	二、二七一	五、四八九	四、三七五	四三、八八八	三、〇二三	五、三九八	九、六六九	五四、九二二
十	二〇二	三五五	四二〇	四、二五〇	三〇六	四七八	九二八	五、〇八三
十一	二三〇	四四七	三九〇	四、四一四	三九五	六一三	〇一五	五、四七四
十二	二二九	三六六	三三五	三、四九九	一八九	四七一	七五三	四、三三六
一	一九五	二九六	一七三	一、九七二	一五四	三七三	五二二	二、六五八
二	一四四	四八二	二〇五	二、四八四	一一四	三二〇	四六三	三、二八六
三	一〇二	二二六	二〇八	二、〇一一	一五九	二四七	四六九	二、五七四

申込件数	撮影駒数	焼付引伸枚数	ポジフィルム	スライド
五一一件	六二、七四〇駒	五九、六〇五枚	七、二三一呎	二〇五駒

7 情報連絡

今年度における東洋学インフォメーション・センターの事業内容は次の通りである。

一、一般情報事務

1 通信処理

東洋文庫の海外連絡事務、例えば海外プロジェクトとの連絡、問合わせに対する回答、出版物、マイクロ・ファイルの注文、交換及びその支払に関する事務を取扱っている。

2 便宜供与

外国人研究者のために、他の研究機関への紹介、翻訳者・通訳の斡旋、資料の収集、宿舎旅行について便宜をはかっている。

3 翻訳サーヴィス

東洋学に関する資料や、論文のレジユメの翻訳、並びにタイプライティングを行っている。

二、アジア研究に関する一般的情報の収集と出版

1 内外の研究者及び研究機関の要覧の作成

- a 国内及び国外の研究機関の資料（特に大学の要覧、学生便覧、職員録等）の収集
- b 外国東洋学者人名辞典作成、国外の研究者一覧作成のためのアンケートを発送し、その回答を整理し、印刷

原稿を作成中である。

c 日本に於けるアジア研究者の受入れ機関に関する資料の収集を行つている。

2 内外出版物の書目の年次書目の作成

a 国内関係では、採録の対象となる文献目録の種類を、アジアに関する人文、社会科学における日本人による調査研究の主題別文献目録、学者の著作目録、日本国内の主要図書館並びに研究所の蔵書目録に置いた。一九五八・九年度出版物についてはカード作成を完了した。

b 国外で出版されたアジア関係の書目については、*Journal of Asian Studies, Bibliography* を基礎としてカードを採録した。

三、アジア研究に関する特殊な情報の収集及び出版

1 「アジア言語の研究と教授法」をアンケートに依つて得た資料をもとに編集集中である。

2 *Selected List of Books on Japan in Western Languages. (1945~1960)* 刊行準備中である。

3 「一九五〇年以後中国で刊行された中国考古学研究論文カードの作成と整理」については、一九六三年十二期分までで作成、整理を完了した。

六 研究調査活動

1 東洋学連絡委員会

財団法人東洋文庫は、戦前からの活動実績により、東洋学研究総合センターとして、広範な研究者の共同利用と一般公開性をもつ研究者に対する便宜供与を行い、専門分野に於ける国内的及び国際的連絡の中心としての役割を果たすことを広く期待されている。従つてその諸事業を、広く全国的組織による東洋学者の総意を反映して運営するため、昭和三十三年より、東洋学に関する主要な研究機関及び研究分野の代表者に依頼して東洋学連絡委員会を組織し、文庫の事業計画を審議し報告をうけ、助言を行うものとした。

昭和三十八年度の委員会は左の如く行われた。

春期 五月十八日（土）

報告 昭和三十七年度事業報告

議事 昭和三十八年度事業実行計画について

秋期 十一月二十日（水）

報告 昭和三十八年度事業中間報告

議事 (イ) 昭和三十九年度事業計画案について

2 特 定 研 究

課題「イスラーム諸国の社会構造の研究」

研究担当者 榎 一雄

研究協力者

荒 松雄（東京大学助教授） 蒲生礼一（東京外国語大学教授） 佐口透（富山大学教授） 嶋田襄平（中央大
学助教授） 土井久弥（東京外国語大学助教授） 遠峰四郎（慶応義塾大学講師） 本田実信（北海道大学助教
授） 松田寿男（早稲田大学教授） 松村潤（日本大学助教授） 三橋富治男（千葉大学教授） 護雅夫（東京
大学助教授） 和田久徳（お茶の水女子大学助教授）

本研究は、文献の収集に重点があり、昭和三十三年度以来同じ趣旨のもとに実施せられてきた継続事業である。

(A) 分担部門を左の如く分ち、資料・研究図書の組織的収集を行なっている。

- 1 中央アジア（特にロシア領トルキスタン） 榎一雄、佐口透
- 2 中央アジア（特に新疆省） 松田寿男、松村潤
- 3 インド 土井久弥、和田久徳、荒松雄
- 4 イラン 蒲生礼一、本田実信
- 5 アラビア 嶋田襄平

6 トルコ 三橋富治男、護雅夫

7 イスラーム法学 遠峰四郎

(B) 三十八年度収集図書

①アラビア語文献 ③ペルシャ語文献 ③トルコ語文献の三種を重点的に購入し、とくに現地刊行のものを主とした外、これと併行して欧米刊行の研究図書の収集にも努めた。これら図書目録は「アジア地域総合研究文献目録」に掲載しているが、できる限り購入次第速報を作成して関係研究者に配付することになっている。

定期刊行物 四冊、アラビア語文献 三六冊、ペルシャ語文献 六冊、トルコ語文献一〇〇冊、ロシア語文献六五冊
欧米刊行イスラーム関係文献（アラビア関係 三冊、ペルシャ関係五六冊、トルコ関係一二冊）

(C) 今後の方針

アラビア・トルコ・ペルシャの三地域と併行して、残りの中央アジア・インド・中国関係の文献収集を予定しており、又これまで日本に集められている関係資料・研究書等の調査と研究状況の調査に当たりたいと希望している。

(D) 収集資料の利用

東洋文庫においては、蔵書の館外帯出は一切行なわないことを原則としているが、本研究において購入した図書資料は別置して利用者の要求に応じ、館外帯出も許可しており、これによつて研究協力者はもとより、広く一般研究者の便宜をはかつてきている。

3 各種研究委員会

第一部 近代現代アジア研究

近代日本研究委員会

近代日本研究委員会は、「開国百年記念文化事業会」よりうけついで（昭和三十五年三月三十一日）近代日本関係資料を基本として、アジアの近代化という広い連関の中での、日本近代史の研究を進め、同時に広く外国人東洋学者の近代日本研究にも便宜を計りうるよう、基礎的調査事業を行つてきた。本年度の事業は左の通りである。

「東洋文庫所蔵近代日本関係文献分類目録、和書マイクロフィルムの部 第三分冊」を刊行した。（B5版 三一―四頁五〇〇部）

なお、本目録の刊行は、昭和三十六年度以来継続せられてきたが、本年度を以て完了、本委員会は一と先ず所期の目的を終了した。

近代中国研究委員会

近代中国研究委員会は、昭和二十八年以来設立準備をすすめ、二十九年十一月ロックフェラー財団の財政的援助を得て発足、できるだけ広く異つた分野の研究者を集めて政治的偏見をはなれた実証的研究を行なうことと各国との研

究上の自由な交流とをめぐり活動してきた。本年度の事業は次の如くである。

(1) 二十世紀中国とその背景に関する研究（フォード財団援助金による）

(4) 研究

佐々木正哉 近代中国における排外運動

山本 澄子 中国キリスト教会の自立運動

村松 裕次 瑞金、延安時代の中共の土地政策

小原 正治 中華人民共和国における土地改革と社会主義改造の研究

市古 宙三 陳 独 秀

(4) 研究者の海外派遣

波多野善大 世界（一ヶ年）

(4) 「解放日報」の索引の作成

(2) 資料の収集と整理

収集図書 中国文 九五四点 邦 文 九八三点 欧 文 三〇四点

(4) 「近代中国研究」の刊行（第五輯）

(2) 近代中国研究センター（アジア財団援助金による）

従来、我が国の東洋史研究の上で、比較的軽視され勝ちであつた近代中国研究の振興をはかるため、特定少数の

研究者の研究を助成するのみに止らず、むしろ広く一般の研究者に研究上の便宜を与える目的を以て開設されたものである。本年度の事業は次の如くである。

(イ) 参考用図書資料の購入整理

(ロ) 参考用図書の編集刊行

a 「東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録」 B5判 二〇四頁

b 東洋文庫近代中国研究室中文図書目録（編集中）

c 日本綜合雜誌所載中国関係論説記事目録（来年度まで継続）

d 江西ソヴェエト関係資料目録（彙報第三号）（刊行済）

(ハ) 近代中国研究センター彙報第三、四号の編集発行

第二部 東アジア研究

敦煌文献研究委員会

敦煌文献研究連絡委員会は、榎一雄氏の努力により昭和二十八〜三十一年度文部省科学研究費交付金をうけて撮影せる、ブリテイッシュ・ミウジウム所蔵スタイン収集敦煌文献を始めとして、国内・国外の現存西域出土古文書・古文献の所在調査、写真撮影・収集・整理及び目録の作成等を行つてその研究の推進を図り、内外における諸機関並びに研究者間の研究情報・連絡、研究上必要な資料の公開、複写サービス等も行つてきた。本年度の事業は左の如く

である。

本年度は、文部省科学研究費交付金総合研究「魏晉南北朝隋唐の地方政治」代表者 鈴木俊（中央大学）の事務局を担当したほか、

①敦煌古文书写真複製並びに分類 ②敦煌出土古文书訳註研究会を月二回開催し、訳註原稿を作成している。

③スタイン本写真取落しの分の補充を行った。数年來行つて来たペリオ本撮影交渉が漸くまとまり、文書三五点のマイクロフィルムを入手し焼付写真を作成した。ベルリンの科学アカデミー・東洋学研究所のトルファン出土文献の撮影を交渉中である。またレニングラードのUSSR科学アカデミー・アジア諸民族研究所との文献交流を開始した。（維摩經變文、讚文に関する資料を入手したほか、*Bibliotheka Buddhica* 等のバックナンバー欠号のマイクロフィルムを入手した。）④「スタイン収集敦煌漢文文献——及び研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文文献——分類目録初稿：非仏教文献之部」の編集刊行

東洋文庫に所蔵される大英博物館スタイン敦煌文献のマイクロフィルムによる内容分類目録で、各文献に関して、それに関する研究文献を注記し、併せてスタイン文献以外の日本、欧米各国探検隊によつて発見紹介せられた西域（中央アジア）出土漢文文献の索引を兼ねしめたものである。本年度は先ず「古文书類第一分冊公文書」を刊行した。（初版二〇〇部）次年度以降において補訂増刷すると共に、「古文书類第二分冊私文书」「第三分冊寺院文书」「典籍類」の三冊を刊行する予定である。

宋代史研究委員会

宋代史研究委員会は、昭和二九年以来、ヨーロッパにおいて企画された宋史提要編纂に関する国際的協力事業を行い、昭和三十一年以来、(1)宋代研究文献目録及び提要の編集、(2)宋代政治史年表の作成、(3)宋代主要文集、宋代名人伝記、墓誌銘等の索引の編集等を行つてきた。本年度の事業は左記の通りである。

1 宋代主要文集索引の編集

前年度に引続き、宋代文集中の重要項目を選択、水心先生文集、真西山文集の語彙についてカード化し、従来の八種の文集についてのカードと共に五十音排列を終つた。

2 宋代名人伝記、墓誌銘索引の編集

前年度に引続き、宋代著名人の伝記を神道碑、墓誌銘、地方志人物伝等からカード化し、索引のための整理を行いつつある。

3 宋代関係研究文献目録の増補

一九五八年(昭和三十三年)以降の各年度について補充を行なうため新出文献を調査し、カードを増補、「文献速報」(季刊)を編集発行した。

4 「宋代史年表」の原稿作成並びに索引カード作成(ハーバード・エンチン研究所よりの補助金による。)

宋史本紀のカード化、年表原稿化を略々終り、続資治通鑑長編、建炎以来繫年要録、宋史全文(静嘉堂蔵)に

よる増補訂正を行った。今年度は特に通鑑続編（静嘉堂及び国立国会図書館蔵、マイクロフィルム・米議会図書館旧北京善本）、正史列伝中の関係記事、宋人文集、画譜その他の原資料に溯つて対校、増補を行ない、補充カード（約三、〇〇〇枚）を作成、更に原稿の補訂及び索引を作成中である。

明代史研究委員会

明代史研究委員会は中国近代化の前段階としての明代史の研究をすすめ、特にアメリカにおける明代伝記事典編纂事業との協力において、明代に刊行された地方志の伝記索引の編纂に着手した。

- 一、明代地方志のなかの名宦志、人物志などにあらわれた明人の伝記をカードに摘録した。摘録の要項は字・号・諡・科挙資格（進士・举人）・本貫（省・府・県）・出典などである。現在これを印刷原稿に作成中である。
- 二、明代史研究文献のカード補充。さきに刊行した「明代史研究文献目録」を補足する意味において、昭和三十八年度に刊行された雑誌・単行本などの明代史に関する研究文献をカードに摘録した。

古代史研究会 西周金文講読研究会を毎月曜開催している。

第三部 満・蒙・朝鮮研究

清代史研究委員会

清代史研究委員会は、東アジア全域に及び広大な清帝国の支配について、その成立過程を中心として研究をすすめ、特に清初史料の整理を行つてきた。

研究会としては、

- 1 満文老檔研究会
 - 2 満州語辞典類の整理
 - 3 清代伝記資料の集成
 - 4 清初実録の整理
 - 5 清初満洲地理の研究
- などを行つてきた。

なお、神田信夫研究員は欧米における満蒙の言語および文献の实地調査のため明治大学より海外に出張した。

また東洋文庫叢刊第十六として「西域同文志」の複製刊行をみたが、これが索引作成のため、満、漢を松村潤、蒙蔵、準を岡田英弘が、回を本田実信が分担し、ローマ字転写を行なつた。

鮮満関係史研究会 李朝実録（明代満蒙史料）講読会、及び朝鮮本の整理・調査、「承政院日記」講読を行つている。

第四部 中央アジア・イスラム・チベット研究

中央アジア・イスラム研究委員会

アジア地域の基礎的研究に対する要望に依りて、文部省科学研究費の総合研究に昭和三十三年度からいわゆる別枠として「アジア地域の社会、経済構造」の研究が認められ、全国二〇余りの研究機関が参加して、それぞれの分担研究課題のもとに事業が進められてきたが、東洋文庫においても、本研究委員会を組織してイスラム地域の専門の研究者の参加協力を求めて、分担課題「イスラム諸国の社会構造」の実施にあたつてきた。本年度も今までと同じく、イスラム関係定期刊物物、トルコ語、アラビア語、ペルシア語文献の組織的収集にあつた。また総合研究としては昨年度と同じく合同研究会の開催や「アジア・アフリカ文献調査報告」の刊行が行なわれた。

チベット研究委員会

チベット研究委員会は、昭和三十一年以来東洋文庫収蔵チベット語文献の整理研究と、蔵和辞典の編集を行つて来たが、その基礎の上に立つた言語学的・宗教学的・歴史学的な総合的チベット研究を行うことを目指している。本年度の事業は左の如くである。

- (1) 蔵和辞典の編集 以下の各種研究を通して収録語彙カードを作成している。
- (2) 「第十三世ダライ・ラマ伝記訳註」：チベットの宗教、政治史の重要資料である歴代ダライラマ伝記研究の一環として、前年度までハーバート・エンチン研究所より援助金をうけて行われていた事業であるが、援助期間満了となつたので一般事業として継続せられた。本年度においては、訳稿作成のかたわら、人名・地名・事項索引カードを作成した。次年度以降においては、左記のチベット研究特別事業の一部として行ひ予定である。

(3) チベット人との協力によるチベット語、宗教、ラマ教史の研究（ロックフェラー財団補助金による）

東洋文庫は質量ともに世界有数のチベット文献を所蔵し、戦前よりわが国におけるチベット研究の一中心であったが昭和三六年度から、ロックフェラー財団の補助金により、インドからチベット人学者三名を招聘、その協力を得てチベットの言語・歴史・宗教の総合的研究を開始した。この研究は各国チベット研究者の協力体制を確立し、研究を推進するための国際提携事業であり、アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツ、オランダ、イタリア、デンマークの諸国が参加している。本研究はチベット学に関する最初の大規模な国際的事業であるばかりでなく、わが国チベット研究史上画期的意味をもつもので、文献の不完全な解説に基いて組立てられていた研究から脱却し、チベット人自身の体験、知識の直接的な報告に基いて研究が進められている。ロックフェラー財団の補助金は、当初より三ケ年（昭和三八年度まで）を以て打切られ、それ以後はそれぞれの国の努力において研究を継続させることとなつた。

本年度の研究事業は左の如くである。

- a 現代チベット語の記述的研究
- b 古代、中世、チベット史料の研究
 - 「バシエ」(金子研究生) 土観ラマ「ドウムタ」(多田研究委員)
 - 「デプテルマルポ」(佐藤研究委員他)
- c ラマ教、新旧両派の比較研究、サキヤ派、ニンマ派教理資料講読
- d 東洋文庫所蔵チベット文献の整理と目録作成

e 歴代ドライラマ伝記(第十三世)研究

f 蔵和辞典語彙カード補充

来年度より、新規三ヶ年計画として、一般事業中の特別調査研究として実施する予定である。

〔付〕 第十一回 日本西蔵学会大会

前年度大会の決定により、今年は東洋文庫を会場として左記の如く開催せられた。
期 日 昭和三十八年十一月十日(日)

研究発表(午後一時〜午後四時)

「チベットにおける大乘と小乗」

東洋文庫 ソナム・ギャムツオ

「ハリバドラの仏身論に見える瑜伽行中觀派的性格」

東北大学 天野 宏 英

「チベット言語学における二・三の問題について」

京都大学 西田 竜 雄

「十八世紀前半のチベットとカトリック宣教師の活躍」

東京大学 榎 一 雄

総 会 (午後四時〜四時三〇分)

懇親会 (午後五時〜七時) (なお文献展示会の項参照)

第五部南アジア・インド研究

南アジア研究委員会

「東洋文庫所蔵歐文旅行記目録」の編集刊行（一〇〇部）

東洋文庫に所蔵せられる一七、八世紀以来の各国旅行家、宣教師、地理学者等によるアジア各地域の旅行記録に関する目録である。

4 研究者養成

東洋文庫は、戦前より研究活動の一環として、東洋学各特殊分野の次代を担う専門研究者を養成するため、研究生の制度があつた。従来、わが国においては、東南アジア、チベット、インド、イスラム圏及び中央アジア、満蒙等、特殊な言語・文字の修得を前提とする研究分野は、基礎的資料の集収も不十分で、その重要性にもかかわらず甚だ立ち遅れていた。戦後特にこうした未開拓分野の振興を目的として、戦前からこれら現地語資料の集収に努力を払ってきた東洋文庫は文部省の補助を得、研究者養成制度が復活された。更に右の特殊分野以外にも、ハーヴァード・エンチン研究所よりの援助金を得て大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年研究の機会を与え、後継研究者の養成が行われてきた。文部省及びハーヴァード・エンチン研究所補助金による、本年度の研究生は左記の通りである。

「チベット史料の研究」

金子良太

八世紀中葉から、吐蕃朝末期までのチベット史および仏教史研究についての重要史料として、吐蕃ティソン・デツ

エン王時代の大臣バセルナンがチベット史についての当時の伝承を覚え書きしたものと伝えられる「バシエー」がある。これには古くは「純バシエー」と「増補バシエー」の二部が存在したことが伝えられているが、現存するものは後者の写本一部のみである。「バシエー」は「プトン仏教史」をはじめとする十四世紀以後成立のチベット史料に多くの影響を残している。中世以降成立の「青冊」(デプテルゴンボ)を初めとするチベット史書に屢々引用され、殆んどは、吐蕃王朝時代の記述を大半「バシエー」によつて行なつており、「バシエー」よりも簡略に、又より仏教的な記述に終始した。従つて、チベット史書のより原型に近いものを復原する研究として現存「バシエー」のチベット文テキストの校訂及び、その邦訳を行なつてゐる。

「明清社会経済史の研究」

従来の中世史研究においては、基本的な生産関係を地主⇓佃戸関係と考え、専ら在地における直接的な生産関係から出発して中世史の性格規定を行おうとした。従つてそこでは政治機構としての専制的な王朝権力の存続が、いかなる理由によつて可能であつたかという問題は捨象される傾向にあつた。このような中世史研究の現状において、基本的な生産関係である地主⇓佃戸関係と、上部構造としてのアジア的デスポティズム存続の条件を矛盾なく全構造的に把握することが必要であり、これらの諸問題を解明するためには、その実現の場である里甲体制の究明が、先ず果されなくてはならない。

このような観点から、まず、里甲体制成立の条件(既存の村落秩序と里甲制との関連、里長戸の物的諸条件の間

鶴見尚弘

題)、里甲体制内の階級関係(自作農と里長戸・畸零戸との支配隷属関係)及び超越的専制皇帝権力の出現と里甲体制等の関係を実録・政書等に見られる諸法令を通して政策の主観的意図を把握し、また地方志・文集・類書等によつて、明代の社会的諸条件を分析し、これらを媒体として権力の性格をあきらかにしようとする。

「通貨問題を通じて見たる宋代財政史の研究」

草野 靖

宋朝の財政は、直接現物の形で庶民から取りたてられる租税収入に拠るよりも、むしろ一層多くの部分を塩、茶、酒などの専売収入や商税などの間接税収入に拠つて支えられていた。そして實際財政を運営するに當つて必要となる穀物、衣類、其他諸々の物資は、その必要に応じて間接税収入を以つて民間から買い上げられていた。この買上げに當つて塩鈔、茶引、見銭取引など種々の証券類が盛用されたことは学界周知の事実である。

ところで、こうした機構を持つ財政が円滑に運用されるためには、どうしても大量の貨幣が必要となつたが、しかし当時の主貨幣たる銅銭の鑄造は銅材の産出からみて限りがあつたため、宋朝は常に銅銭不足、所謂錢荒に苦しめられ、且つこの苦しみは、宋朝の支配機構が充実し財政の規模が拡大されればされる程に大きくなつていく。其処で歴代の財政家達はこの問題の解決のために大いに努力を払い、いろいろ手を尽すのであるが、この動きを辿つてみると、其処に当時の商品流通の様相や金融信用機関の発展の動きをうかがうことが出来るようである。

私見では、政府財務機関に大量の銅銭を確保し、これに依つて国家財政を充実させようと努力して、且つその努力が最高度を実施されたのは神宗朝の王安石執政の時代であり、これより以降は銅銭に依る財政運営は衰微の一途を辿り、

殊に徽宗朝の蔡京執政の時代には、硬貨不足を補うため、実質価値を伴わない悪貨が濫発された結果、通貨が混乱し商業界に非常な動揺を来すが、やがて南宋時代に入つて紙幣が利用されるに至ると、一応この混乱は克服されていく。しかしこの紙幣も発行高がかさんでインフレーションの様相を呈して来ると、銀が愈々貨幣的機能を發揮し始めて流通界に登場し、やがてこの銀に依つて紙幣が駆逐されるという動きが出て来る。そしてこの傾向は、次ぎの元代の紙幣・銀の競合時代を経て明代に入り、銀が支配的地位を得て紙幣が廃止されるに至るまで進んでゆく。即ち銅銭を立ての時代から悪貨利用の時期を経て、紙幣の利用へ、更に銀立てへと云う推移をみる事が出来るのであるが、今後の研究計画としては、先づ紙幣が盛用された南宋時代に就いて、紙幣の発行組織流通経路、特に紙幣の流通を支えた商品の流通機構、紙幣と銅銭・銀との流通関係を検討し、尋いで北宋時代に及んで、銅銭立てから、紙幣利用へと移つてゆく動きを捉えて一応の結びとし、更には出来得る限り、元明時代にも目を移して銀使いの発展を追い、宋代通貨問題の理解を一層深めたい所存である。所謂紙幣は銅銭から銀両へ移る過渡期の通貨であり、その意味で研究の対象は銀両遣いの成立する時期にまで押し下げるのが正当であるからである。

「朝鮮中世史」

武田 幸男

朝鮮中世史に関する研究を次のような項目にわたつて行なつた。(イ) 高麗時代の郷職について 高麗時代の郷職は同時代の郷吏職とまぎらわしく、事実混同されて扱われて来たのであるが、両者の区別を明らかにし、郷職の意義を高麗王朝独自の秩序体系と解しうるに至つた。なお本項の成立期の諸問題について当文庫談話会で報告した。(ロ) 高

麗時代の郷史について 高麗時代の郷史は一面土豪と解されるが、その実態は未だ不明の点が多い。そこで史料の集収を中心に基礎的研究を行った。(イ) 李朝の姓氏・地誌について 姓氏の研究は朝鮮中世史研究において重要な地位を占めるべきであるが、未開拓の分野である。実録地理志、輿地便覧等の地誌を主にしながら史料分析の基礎的研究を行った。

5 職員の研究業績

青山定雄

(論文) 「南北朝時代の総誌について」(『岩井博士古稀記念 典籍論集』一九六三年六月 一一一—一八頁)

() 「宋代における華北官僚の系譜について」(『聖心女子大論集』 二二号 一九六三年一〇月 二二—四一頁)

生田滋

(紹介) 「スペイン国立古文書館のガイドブックについて」(『東洋学報』四六卷三号 一九六三年一二月 一四三—一五〇頁)

石黒弥致

(論文) 「舍竭羅城」(『典籍論集』 一九六三年六月 三四—四二頁)

岩井大慧

〔論文〕「永樂大典現存卷目表（新訂）」〔典籍論集〕卷首 一九六三年六月、一一七〇頁〕

岩生成一

〔論文〕「Reopening of the Diplomatic and Commercial Relations between Japan and Siam during

Tokugawa Days.」(Acta Asiatica No. 4 1963. pp. 1~3)

「長崎の町年寄後藤庄左衛門伝補遺」(法政大学人文科学研究彙報、五・六合併号、一九六三年十二月
一一九頁)

「鎮国」(岩波講座「日本歴史」近世2 一九六三年十一月 五七一—〇〇頁)

梅原末治

〔論文〕「豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」(国華 八五三号、一九六三年四月 五一—〇頁)

「Ancient Mirrors and their Relationship to Early Japanese Culture.」(Acta Asiatica.

No. 4. 1963. pp. 70~79)

「上古の碧玉製品の二三に就いて」(大和古文化研究、八卷七号 一九六三年七月、一一—三頁)

「奈良時代の金銅四耳銀壺」(大和古文化研究、八卷一〇号 一九六三年一〇月、一一—六頁)

〔講演〕「東亜の古ガラス」(東洋文庫秋期東洋学講座、一九六三年十一月六日)

「日本における甲骨学と殷墟の研究」(東方学会第十三回総会一九六三年十一月七日)

榎 一雄

(論 文) 『職方外紀の刊本について』、『典籍論集』一九六三年六月 一三六一—一四七頁)

『梁職貢図について』、『東方学』二六号 一九六三年七月 三二—四六頁)

『滑国に関する梁職貢図の記事について』、『東方学』二七号 一九六四年二月 一一—三三頁)

(講 演) 『仲雲族の牙帳の所在地について』 (史学会第六二回大会東洋史部会 一九六三年一月一〇日)

『十八世紀前半のチベットとカトリック宣教師の活躍』 (第十一回日本西蔵学会大会 一九六三年一月一〇日)

『The Nestorian Christianity in China in mediaeval time according to recent historical and archaeological Reserches.』 (Accademia Nazionale dei Lincei, Atti del Convegno Internazionale sul tema: L'Oriente Cristiano nella Storia della Civiltà, Rome 31 marzo—3aprile 1963)

(その他) 『和田清先生を偲んで』、『東洋学報』第四六卷第一号 一九六三年六月 一四三—一四九頁)

『和田清博士の訃』、『史学雑誌』七二—一〇 一九六三年一〇月 一一三—一五頁)

『和田清博士追悼録』、『東方学』二七号 一九六四年二月 一三七—一五四頁)

神 田 信 夫

(論 文) 『張洪の使緬録について』、『典籍論集』一九二—二〇〇頁)

菊 池 英 夫

(書 評) 『谷霽光著『府兵制度考釈』』、『東洋学報』第四六卷第二号 一九六三年一〇月 一一二—一三三頁)

「ジェルネ著『蒙古侵入前夜（一二五〇—一二七八）における中国の日常生活』」（『東洋学報』第四六卷第四号 一九六四年三月一二二—一二八頁）

〔座談会〕「均田制をどう見るか」（『東洋文化』三七号、一九六四）

草野 靖

〔論文〕「宋代の主戸・客戸・佃戸（上）（下）」（『東洋学報』第四六卷第一号二号 一九六三年六月九月）

河野 六郎

〔座談会〕「日本における朝鮮研究の蓄積をいかに継承するか、(B)日本の朝鮮語研究について」（『朝鮮研究月報』

一二二号 一九六三年一〇月 一〇—二六頁）

後藤 均平

〔紹介〕「『豊西発掘報告』によせて」（『東洋学報』四六卷三号 一九六三年二月 一三一—一四頁）

佐々木 正哉

〔論文〕「咸豊三年厦門小刀会の叛乱」（『東洋学報』第四五卷第四号 一九六三年三月 八七—一二二頁）

「咸豊二年郵票の抗糧暴動」（『近代中国研究』五輯 一九六三年五月 一八五—二九九頁）

「咸豊四年広東天地会の叛乱」補（『近代中国研究センター彙報』三号 一九六三年九月 三一頁）

〔資料紹介〕「同治年間教案及び重慶教案資料」（『東洋学報』四六卷三号 一九六三年二月 七八—一〇七頁）

〔書評〕「広東省文史研究館編『三元里人民抗英闘争資料』（『東洋学報』第四五卷第四号 一九六三年三月）

一二九—一三二頁)

末松保和

(論文) 「唐曆と唐録—日本国号考の一節—」 (『典籍論集』 一九六三年六月 二八四—二九〇頁)

(書評) 「藤田亮策著『朝鮮学論考』」 (『朝鮮学報』 三〇輯 一九六四年一月 一三八—一三九頁)

鈴木俊

(論文) 「新唐書食貨志の史料考察」 (『典籍論集』 一九六三年六月 二九一—二九八頁)

関野雄

(論文) 「古国の古代貨幣」 (『古代史講座』 九卷 一九六三年一月 三四八—三六九頁)

田川孝三

(論文) 「庚辰字本孝經諺解と小学諺解、付影印孝經諺解」 (『朝鮮学報』 二七輯 一九六三年四月 六二—

〇六頁)

武田幸男

(論文) 「高麗・李朝時代の属県」 (『史学雑誌』 七二—八 一九六三年八月 三一—五二頁)

(書評) 朝鮮民主主義人民共和国科学院歴史研究所編「朝鮮通史上」 (『朝鮮学報』 二八輯 一九六三年七月

一三二—一三九頁)

田中正俊

(論 文) 『禹域通纂』と『西行日記』 (『典籍論集』 一九六三年六月 八五六―八七一頁)

(翻 訳) 「新建設」編輯部編『中国史上における農民戦争の性格、作用およびその特徴について』 (『歴史評論』 一五九号 一九六三年一月 三二―四二頁)

田 中 時 彦

(論 文) 「日本における鉄道導入政策の政治的背景——その国際的国内的要因に関する史的分析——」 (都立大 法学会雑誌、三一―二合併、小倉・黒田教授選歴祝賀記念号、一九六三年三月、四六五―五〇一頁)

辻 直 四 郎

(書 評) 「C・G・カーシカル編『シュラウタ祭全書』第一卷英文部第二部」 (『東洋学報』 四六卷三号 一九六三年一二月 一四一―一四二頁)

原 田 淑 人

(著 書) 『古代人の化粧と装身具(創元選書写真シリーズ)』 (創元新社 一九六三年四月 B6判 一九〇頁)

(論 文) 「伎楽の系譜―東と西3―」 (『聖心女子大学論叢』 二〇号 一九六三年三月)

松 村 潤

(論 文) 明初の東チャガタイハン国(日本大学史学会研究彙報 第七輯 一九六四年三月、一九―三二頁)

「星源集慶について」 (『典籍論集』 一九六三年六月、六四五―六五〇頁)

(編 書) 「欽定西域同文志・下冊」東洋文庫叢刊 第十六

護 雅 夫

- (論 文) 「ウチユケン山と古代遊牧国家」(遊牧社会史探求 20 一九六三年三月 二九—三二頁)
- 「元代ウイグル文土地売買文書一通」(『典籍論集』 一九六三年六月 七二—七二七頁)
- (書 評) チュルク文化研究会「チュルク文化」(『東洋学報』 第四六卷二号 一九六三年九月 一四—一四二頁)
- (論 文) 「東突厥官称号考——鉄勒諸部の俟利発と俟斤——」(『東洋学報』 四六卷三号 一九六三年一月—一三〇頁)
- (翻 訳) アンネマリエ・フォンリガベン「ウイグル王国における品位のある姿勢」(『東洋学報』 四五卷三号 一九六二年一月 九四—一〇四頁)
- (講 演) 「東突厥国家内部の胡人」(広島史学研究会総会 一九六三年十月)
- (書 評) Liu Mau-tsai: *Die chinesischen Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken* (『史学雑誌』 七二編三号 一九六三年三月 七一—八二頁)
- フォンリガベン著「高昌のウイグル王国(八五〇—一二五〇年)」(『東洋学報』 四五卷四号 一九六三年三月)
- (書 評) コルクマズ著「チュルク語の後置詞 Ücün~ücün そのほかの語源について」(『東洋学報』 四五—四号 一九六三年三月 一三四—一四三頁)

B・オゲル著「古代チュルクの Sad (sarb) 号について」〔「東洋学報」四六卷二号一九六三年九月
月 一一一—一二二頁〕

ハンガリー科学学士院発行「アクタ・オリエンタリア 一六卷一号」〔「東洋学報」四六卷四号一九
六四年三月〕

山口瑞鳳

〔論文〕「顧実汗のチベット支配に至る経緯」〔「典籍論集」一九六三年六月 七四—七七三頁〕

山根幸夫

〔論文〕「大明官制について」〔「典籍論集」一九六三年六月 八三七—八四七頁〕

〔書評〕「任以都訳註『六部成語註解』」〔「東洋学報」第四六卷第二号 一九六三年九月 一三四—一三八頁〕

山本達郎

〔編書〕「宋会要交趾伝訳註稿(一)」〔「南方史研究」三号 一九六三年八月 一一—四九頁〕和田久徳氏と共編
〔論文〕「嘉隆二年の田土丈量文書」〔「典籍論集」一九六三年六月 八七二—八七九頁〕

附一 東洋文
庫附置

ユネスコ東アジア文化研究センター

(The Centre for East Asian Cultural Studies)

ユネスコ東アジア文化研究センターは、東洋文庫の情報連絡機関としての機能に基づき、ユネスコの要望によつて、昭和三十六年七月一日東洋文庫の附置機関として設立せられた。

ユネスコは一九五七年以来、向う十年間の継続事業として「東西文化価値の相互理解に関する重要事業計画」(The major project on the mutual appreciation of Eastern and Western cultural values) を推進してゐるが、この目的遂行に恒久的に貢献する施設 (associated institutions) として、まず一九六一―六二年度に東アジア(ビルマ以東) 各国の研究機関の連絡網の中心となるべきセンターの設立が計画された。同じ趣旨による同様の施設がベイルート、ダマスカス、テヘラン、ニューデリー等のアジア各地にも設置せられつつある。日本ユネスコ国内委員会は、これに呼応して、人文科学・社会科学の両分野に亘る東アジア地域の総合的文化研究を促進し、その成果を世界に紹介し、アジアに対する正しい理解を増進させるため、このセンターを東京に設置することとし、従来とも東洋学に関する国際的情報連絡機関としての役割をも果たしてきた東洋文庫に、これを附置することとなつた。

一 目 的

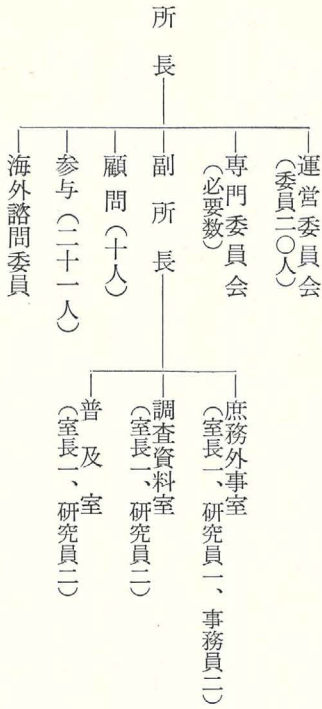
東アジア各国に於ける研究機関と連絡して東アジア(ビルマ以東) 地域の各国に於ける東アジア文化に関する研究

(人文科学・社会科学)の情報・連絡を緊密にすると共に、その研究を促進し、且つ成果の普及を計る、いわばクリ
アリング・ハウスとしての機能を發揮することを目的とする。

二 経 営

当センターの経費は政府補助金及びユネスコ援助金によつて賄われる。

三 機 構



四 役員及所員

所長 辻直四郎

運営委員 *赤石清悦

*中村元

福井康順

桑原武夫

高橋幸八郎

*一又正雄

*岡野澄

貝塚茂樹

松本信広

結城令聞

東畑精一

服部四郎

岸本英夫

*坂本太郎

*田中一松

岩生成一

*尾高邦雄

*前田陽一

*山本達郎

*吉川幸次郎

顧問

大浜信泉

小島祐馬

高垣寅次郎

参与

青山秀夫

岩淵悦太郎

海後宗臣

鈴木俊

高橋長太郎

時枝誠記

鳥養利三郎

久松潜一

和田清

石田幹之助

長尾雅人

丸山真男

宮本正尊

水野清一

金田一京助

鈴木大拙

和(昭和三十八年六月二十二日逝去)

石田英一郎

織田武雄

城戸又一

関口隆克

田村実造

原田淑人

宮沢俊義

岩井大慧

仁井田陞

宮崎市定

三上次男

渡辺進

(*印は 任期三年)

所員

副所長 榎 一雄

所員 生田 滋

岩崎 富久男

大谷 公子

岡田 英弘

後藤 均平

齊藤 博

高橋 竜雄

田中 時彦

二宮 久

平野 豊

(東洋文庫総務部参事兼務)

五 運 営

運営委員会(委員二〇名) 事業の運営に関する事項を審議する。

顧問会議(顧問一〇名) 所長の諮問に応じ、事業について助言する。

六 事 業

センターの行う事業の主なるものは左の如くである。

1 国際的協力による調査研究

2 内外研究機関との連絡および情報資料の交換

3 東アジア文化研究に関する資料の調査蒐集および交換

4 上記の諸事業、諸情報を速報する「東アジア文化研究」(センター機関誌、季刊)の刊行

5 東アジア文化研究に関する諸資料の刊行

(イ) 内外研究機関及び研究者一覧

(ロ) 各種の文献目録類

6 東アジア文化の研究成果の普及

(イ) 研究書・概説書の出版

(ロ) 非専門読者対象の読物「東アジア文化研究叢書」の編集刊行

7 東アジア文化に関する、東アジア地域外（主としてヨーロッパ）に保存されている史料の調査

8 内外学者の研究に対する便宜供与

9 フェローシップの企画および斡旋

10 研究会・講習会の開催

11 国際会議・シンポジウムの開催

12 その他センターの目的達成に必要な事業

* 刊行物はすべて英文である。

七 昭和三十八年度事業概況

I 運営委員会及び顧問会議

1 運営委員会

第一回 〔日 時〕 昭和三十八年七月二日（火）

〔出席者〕 十一名

〔議題〕 一、運営委員の改選について

二、昭和三十七年度事業報告について

三、昭和三十八年度事業計画について

四、昭和三十九年度予算概算要求について

五、調査研究(A)の国際会議について

第二回 〔日 時〕 昭和三十九年三月十七日（火）

〔出席者〕 六名

〔議題〕 一、昭和三十八年度事業報告

二、一九六三～六四年度ユネスコ援助金について

三、国際シンポジウムの準備について

本年度は、各事業の専門委員会、もしくは専門小委員会が強固になりこの方面の委員会討議が事業を推進する原動力となつたため、当初予定の開催回数が増加した。

2 顧問会

〔日時〕 昭和三十九年三月十七日（火）

〔出席者〕 二名

〔議題〕 一、昭和三十八年度事業報告

二、一九六三—六四年度ユネスコ援助金について

三、国際シンポジウムの準備について

II 調査研究

ユネスコ東アジア文化研究センターにおける調査研究事業の概要は下記の通りです。

1 調査研究 (Project A)

Cross-national research on social stratification and social mobility in Asian countries and publications of its results.

「東アジア諸国における社会階層と社会移動に関する国際的協力調査」

このプロジェクトは昭和三十六年度に、ユネスコの承認を得て、その正規事業として、昭和四十一年度までの六年計画の事業として発足した。本年度はその第三年目に当り、ユネスコの一九六三—一九六四年プログラムに基いて、昨年度収集し終った関係各国の研究協力者からの、上記課題に関する各国の研究動向報告書を整理し来年度初頭に開催される予定の国際シンポジウム（東アジア諸国における社会階層と階層移動に関する国際シンポジウム）の資料として活用されるべくその準備を完了した。

専門小委員会 六回、特別委員会 五回

2 調査研究 (Project B)

International research on the historical background of East Asian countries' acceptance of western civilization and publications of its results.

「東アジアにおける西洋文明の受容における歴史的背景についての国際的協力調査」

このプロジェクトは昭和三十七年度にユネスコ正規事業としての承認を得て、昭和四十一年までの五カ年計画事業として発足した。本年度はその第二年度に当りユネスコの一九六三—一九六四年プロジェクトに基いて、研究のための調査資料を作成し、昨年度に引続き、各国の協力者・協力機関にこれを配布し、国内外のレポートの整理も同時に行った。

なお、本年度において専門委員会は二回開催した。

Ⅲ 連絡及び情報

ユネスコ東アジア文化研究センターにおける連絡および情報交換事業の概要は下記の通り。

1 内外研究機関及び研究者一覧(英文)の作成

本年度は東洋文化の研究に従事している研究者、その他の関係者の便に供するためにアジア各国の研究機関ならびに研究者についての調査を昨年度に引続き各国に協力依頼を行い、そのうち収集完了した東洋文化の研究に当たっている研究者及び研究機関の一覧を英文で刊行した。

Research Institutes and Researchers of Asian Studies in Thailand (Directories No.4) ii.56p. 21cm
Supplement: Research Workers of Asian Studies in the Republic of Korea with Index. xxivp.
21 cm

2 季刊「東アジア文化研究」(英文)の刊行

本年度は全四分冊を合本として刊行した。

East Asian Cultural Studies vol.III : Nos. 1—4 105p. 26 cm

3 文献抄録の作成

本年度は、研究者及び研究機関が研究を進めるために必要不可欠の文献抄録の「東アジア研究に関する文献目録の目録」(英文)出版を行った。

Bibliography of Bibliographies of East Asian Studies in Japan (Bibliography No.3.) 190.xvii p.

21 cm

4 地域外資料目録の作成

本年度は前年度に引続き東アジア研究にとって不可欠のヨーロッパ資料の調査のため、ユネスコ古文書研修生として、欧米に派遣されていた当センター職員生田研究員を介して、ヨーロッパ、特にポルトガル・アシユダ古文書館に保存されている東アジア関係資料を調査し、その主要なものをマイクロフィルムに撮影依頼を行った。

5 図書資料の購入

前年度に比して連絡情報交換の大幅の拡充とそれに基く上記諸事業の出版編集のため、当初予算計画を大幅に変更してこれに関する図書資料を収集した。

IV 出版物の作成

(1) 研究書・概説書の翻訳・出版

前年度翻訳を完成した董作賓稿「甲骨学五十年」をセンター刊行物として本年度出版した。

Tung Tso-pin : Fifty Years of Studies in Oracle Inscriptions, vi, 148 p, plate XVII. 22cm

また、本年度において翻訳を行い、来年度出版の計画である「タイ国年代記」は、その英訳を完了した。

(2) 非専門読者対象の読物の編集

「東アジア文化研究叢書」(英文)として前年度に引続き、下記の図書を編集した。

羅 香 林 「香港と泰西文化の交流 II」(Series No. 7)

チョムチャイ編訳「ラーマ五世(チュラロンコン大王)」(Series No. 8)

多田 等 観編訳「ダライ・ラマ十三世」(Series No. 9)

V シンポジウム・研究会・講習会等の開催

(1) 講習会

本年度は朝鮮語の講習会を東洋文庫において行った。

〔期間〕 昭和三十八年八月五日〜九月五日

〔出席者〕 十二名

〔講師〕 河野六郎、梅田博之、大江孝男、朴泰根、末永貞子

Ⅱ 便宜供与

センター事業活動に伴い、来日外人研究者に対する便宜供与は年々著しく増大した。その主要なものは下記の如くである。

- Cohen, Myron, U. S. A. Postgraduate Student (Anthropology), April, 5
Agassi, Judith, HonKong Prof. of Univ. of HonKong (Political Science) April, 10〜11.
Berton, P. A. U. S. A. Prof. of Univ. of Southern California (Modern History, International Relations), April, 25.
Feuerwerker, A. U. S. A. Prof. of the University of Michigan (History) April, 25.
Adoun, J.E. Ecuador Chief, Dept. of Cultural Extension, Ministry of Education, June.
Altuchow, N. Uruguay Prof. of Universidad de la República (Humanities), April.
Campo, Del Anibal " Prof. of Philosophy, Member of Unesco National Commission, April
Panopio, I. Philippines Teacher, May 20.
Abueva, Jose V. " Ass. Prof. of University of the Philippines (Political Science), May 26.

Peng Cheng-kong, China Section Chief, Ministry of Education, May 29.

Abella, Pedro, Philippines Chief of Cultural Activities Section, Unesco, Manila, July 8.

Chomchai, P. Thailand Ass. Prof. of Chulalongkorn Univ. (Political Science and Economics),

July 24—Aug. 24.

Talbot, H. D. Hong Kong Lecturer of University of Honkong (Geography), Aug. 8

Presler, H. H. India Prof. of Leonard Theological College, Jadapur (Theology), Aug. 9.

Graciela de la Lama de Gonzales Tejada (Mrs.) Mexico Coordinator of the Oriental Studies

Centre, Colegio de Mexico, Mexico City (Indology), Sept. 3—20.

Suresh Awasthi, India Ministry of Education, India Govt.

Prince Prem Purachatra, Thailand Professor, Chulalongkorn University, Thailand.

Kyle, John U. S. A. Director of Publishing Program, East West Center, Hawaii.

Lynch, F. U. S. A. Director, Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila, Philippines.

附(二) 東洋学術協会

評議員 石田 幹之助 岩井 大慧 岩生成一 梅原末治 榎 一雄

白鳥 清 末松 保和 辻 直四郎 原田 淑人 三上 次男

山本 達郎

編輯委員 市古 宙三 衛藤 藩吉 栗原 朋信 河野 六郎 斯波 義信

関野 雄 坂野 正高 藤井 宏 藤田 正典 堀 敏一

村上 正二 守屋 美都雄 箭内 健次 和田 久徳 菊池 英夫

常任委員 池田 温 宇都木 章 榎 一雄 神田 信夫 護 雅夫

北村 甫 佐々木 正哉 田中 正俊 松村 潤

山根 幸夫

幹事 白川 邦子

東洋学報第四拾六卷第一号—四号目次

第四拾六卷第一号(昭和三十八年六月)

契丹隸字考—女真字の源流……………豊田 五郎

莊子逍遙遊本文整理私案……………天野 鎮雄

宋代の主戸・客戸・佃戸(上).....	草野靖
最近の漢語音韻研究―切韻の基礎音系に関する論争.....	坂井健一
中国科学院歴史研究所資料室編「敦煌資料第一輯」.....	池田温
メイリンク・ルーフス著「アジア貿易とヨーロッパの影響」 ——五〇〇年から一六三〇年頃までのインドネシア諸島における——.....	永積昭一
ローゼンタール著「十九世紀以前のムスリムの自由概念」.....	嶋田襄平
和田清先生を偲んで.....	榎一雄
第四拾六卷 第二号(昭和三十八年九月)	
可汗浮図城考(上).....	嶋崎昌
九品官人法の制定について.....	越智重明
宋代の主戸・客戸・佃戸(下).....	草野靖
唐・宋の客戸に関する諸研究.....	中川学
オゲル著「古代チュルクの Šad (sa-Baš) 号に()」.....	護雅夫
谷霽光著 府兵制度考釈.....	菊池英夫
任以都訳註 六部成語註解.....	山根幸夫
中華民国開国五十年文献第二編 武昌首義開国規模.....	菊池貴晴

チュルク文化研究会「チュルク文化」	護	雅夫
第四拾六卷 第三号(昭和三十八年十二月)		
東突厥官称号考—鉄勒諸部の俟利発と俟斤—	護	雅夫
可汗浮図城考(下)	嶋	崎昌
清代の里書—清代財政問題の一齣	佐	伯富
同治年間教案及び重慶教案資料	佐	々木正哉
「豊西発掘報告」によせて	後	藤均平
敦煌変文研究の動向(一)—資料研究を中心に—	金	岡照光
劉子健著 欧陽修的治学与従政	斯	波義信
太平天国歴史博物館編 太平天国史料叢編簡輯	河	鱒源治
カーシカル編「シユラウタ祭全書」第一卷 英文部第二	辻	直四郎
スペイン国立古文書館のガイド・ブックについて	生	田滋
第四拾六卷 第四号(昭和三十九年三月)		
最近偶目した中国地主制関係文書について	村	松祐次
ダルマ王の子孫	佐	藤長
同治年間教案及び重慶教案資料(下)	佐	々木正哉

敦煌変文研究の動向 (一)―変文の本質、総論に関する研究―	金岡照光
松丸道雄著 殷虚卜辞中の田獵地について―殷代国家構造研究のために―	池田末利
ジエルネ著 蒙古侵入前夜(一二五〇―一二七八)における中国の日常生活	菊池英夫
ハンガリー科学院発行「アクター・オリエンタリア」一六卷一号・一九六三年	護雅夫
ジョーンズ・Jr 著 カーレン語研究	西田竜雄
第二十六回東洋学者会議に参加して	榎本杜人
楽浪の漢印と封泥 (講演要旨)	榎本杜人

昭和三十九年十二月二十一日印刷
昭和三十九年十二月二十五日発行

(非売品)

財団法人東洋文庫年報

東京都文京区駒込上富士前町一四七
発行者 榎 一 雄

東京都文京区白山二丁目十二番五号
印刷所 創 文 社

東京都文京区駒込上富士前町一四七
電話 (942) 〇一二一

発行所 財団法人 東洋文庫

(振替 東京六七〇二三番)